

小田原史談

第240号

発行所 小田原史談会
小田原市東町1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

「片岡日記」の背景をさぐる

星野 和子

現在小田原市立図書館に所蔵されている特別集書「片岡文書」の中にある「片岡日記」は、幕末に生まれ、明治期には小田原町の議員、助役といった公職を歴任、その後藤沢貯蓄銀行(後関東銀行)の小田原支店長として在職される傍ら、郷土史家として活躍された片岡永左衛門の日記である。よく間違えられるのは、小田原市立図書館郷土資料集成として発刊されている『明治小田原町誌』が「片岡日記」ではないかということである。という私も、今から三十数年前、小田原市史の編纂事業に携わった当初にはよくわかっていたわけでもなかった。

以前、「震災日記」という題で、「片岡日記」の大正十二年から十五年にかけての部分が『小田原史談』百六十号から二百二十一号に

四十七回にわたり、岡部忠夫さんと勝俣淳一郎さんの手により翻刻掲載されている。百五十八号には、この掲載のきっかけとなった「関東大震災」と題する岡部さんの文もある。

この度「片岡日記」の昭和期の部分を掲載するという企画があるということ、で、「片岡日記」を読む上での利便を考え、概略について紹介することにした。

『明治小田原町誌』と「片岡日記」

あらためてみると、『明治小田原町誌』(以下『町誌』)は確かに片岡永左衛門の筆になるものであるが、「片岡日記」からの引用こそあれ同一のものではなく、「片岡日記」にはむしろどのようにして『町誌』が編集され、そして発刊されたかという過程を逆

に記録しているのである。たとえば、明治四十五年四月二十四日の項には「町政史の材料を役場で謄写」とあるように、資料集めをしていた記事も見られる。また、石井富之助さんはこの『町誌』発刊へのいきさつをその解題で「片岡さんが郷土史研究を志したのは、自家に本陣ならびに町方の文書を多数所蔵していたことと、函東会報告誌の諸研究によって啓発されたことが、主たる理由になっている」と、片岡さんから「助役時代に町役場の倉庫にあった古い記録を全部ひっくりかえし、夜遅くまでひとりで写した」という話を聞いている事がのべられ、資料集めに着手したのは明治三十三年頃からではないかと推測されている。また発刊されている『町誌』の底本となる謄写版印刷本ができる経過についても詳しく触れられているので一読をお勧めする。

さて「片岡日記」に話をもどすと、残念なことに、この「片岡日記」は、関東大地震で大正のはじめから大正九年までの部分が失われてしまった。それでは最初はいつ頃から書き始められていたのか。現在残されているのは明治三十五年四月からである。ただこの日記も整然と整理された感があるのは私だけだろうか。『町誌』には「片岡日記」引用とあるが、

二百四十号(平成二十七年一月号)

目次

「片岡日記」の背景をさぐる

星野 和子・・・1

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝・・・5

「片岡日記」昭和編(一)

片岡 永左衛門・・・6

第八回史談会セミナー予告・・・9

小田原の郷土史再発見

江戸の遊郭「吉原」開設者

庄司甚右衛門は小田原出身!

石井 啓文・・・10

宮之前的山田呉服店(上)

山田 影夫・・・14

小田原大秘録 第八回 卷三の一

鳥居 泰一郎・・・18

新会員紹介・・・21

久所の始まり

宮原 諄二・・・22

真田氏の城下町

松代の史跡巡り

河合 多美江・・・26

川越方面史跡巡り案内・・・27

落穂集

特別賛助会員・・・28

記述がない箇所があるのはほかに日記があつたのかを想像させるに難くない。一般的に日記とはいっても、日々書き留めたものではなく、備忘録に書き留めておいたものを改めて清書しなおす方法もとられていたことを考慮する必要もあるかもしれない。

明治期はそうであっても、その後の昭和期にはいると、一日分の日記の記事の量は増え、さらに新聞記事のスクラップがあること、その日その日によって筆致が変わっていることなどから見ると、おそらく清書はされていまいとみるのがよいだろう。ちなみに「片岡日記」の最後は、軽い脳溢血を患った後の昭和九年十二月三十一日で終わっている。

改めていつ頃からということになると、『町誌』に使われている資料について、凡例には、「片岡日記」のほかに、小田原藩年寄役早川矢柄の覚書、御用人久保田義敬の手控、御用人関重磨の「六十夢路」、藩士榎嶋主令の日記、副戸長吉田元延の手控、質商関善左衛門の母喜久子の日記、片岡翁之助の日記・御用留、辻村氏・飯田氏の御用留、久野久津間氏・鍛冶屋柏木氏の文書などがあげられている。中でも「片岡日記」と同様に明治期の小田原町の情景を多く記述しているのは、「関喜久子日記」である。関喜久子につ

いては不明な点が多いが、亡くなった年から推測すると、永左衛門の親と同じ世代であつたと思われる。明治二十年までは多く引用されているが、それ以降はこの日記の引用はなく、現在残されている「片岡日記」の明治三十五年から引用が再開されるところから、やはり、「片岡日記」の最初は明治三十五年四月でよいのかも知れない。

「片岡日記」の記事内容について明治期の「片岡日記」の内容は、親しい人たちとの交流や、二宮神社の創設、高等女学校の開設、教育会組織のこと、二宮尊徳五十年祭資料の収集をしていた内務省嘱託の留岡幸助との交流、神奈川県農会技師となつた長男親一の指導で岡田寅吉と蜜柑の栽培から出荷に尽力したこと、町会議員・助役在職中の水道布設問題や日露戦争中の小田原町の動向、海嘯被害と防波堤建設の状況といった政治的な動きから日常までが記されている。助役退任後の明治四十年代の「片岡日記」は、町政にかかわることは極端に少なくなり、就職した銀行並びに実業界のこと、箱根の木賀亀屋で拝謁後に信奉者となる陶宮術家吉川尹哲(いんてつ)のこと、自然災害の様子、社会の風潮への関心といった個人的記述が大半を占め、

明治天皇の大喪をはじめ東京方面へ足を運んでいることもわかる。

また、生家が小田原宿の本陣であつた事から、皇室・皇族の情報を侍従を通じて多く収集していることも特徴としてあげられる。現在のようにメディアが発達していない時代であるにも関わらず、幕末から明治への時代の移り変わりについて、小田原町の風景・情景が人びとの生活を中心とした視点から、私見を交えて多岐にわたり記述されている。その意味では、新聞や映像と同じような真に迫る時代の情報を提供してくれる。

大正期では、明治期に引き続き人びととの交流や町政・町の景観の変化、生活慣習の由来をはじめ、熱海線(現在の東海道線)小田原駅開業にともなう小田原の町の変化を銀行の支店長という立場から、経済的視点で観察している記事が多く見られる。何と言つても圧巻なのは、関東大震災の被災状況・復興状況に関する記載である。公文書とは違い、町民の心情の奥まで読み込み表現している記事は、後世へ災害の警告や復興への強い心持ちは何であつたかを示している。また、震災後の金融不況への対処に迫られる記述、このような状況の中、郷土史家として『増補相中雑誌』『町誌』、そして

小田原藩史編集への取り組みを始めるなど、とにかく日々多岐にわたって精力的に活動していたことが伺われる。

昭和期は、昭和三年二月銀行に辞表を提出してからの、郷土史家としての本格的な活動が記事の中心になっていく。それらは『足柄史料』『駅鈴余音』の刊行に向けての作業や、小田原出身で東大史料編纂掛となつた相田二郎との交流、史跡天然記念物保存協会への参加、徳富蘇峰・沼田頼輔・石野瑛・黒板勝美といった第一線の歴史家や中山毎吉ら県内の郷土史家との交流、小田原藩史料収集のため瀬戸秀兄・小川量平・梅村鑑吉と辻村写真館主をとまな



右より片岡永左衛門・小川量平・瀬戸秀兄・梅村鑑吉
小田原市立図書館蔵(梅村志直氏寄贈)

い足柄上・下郡の史跡探訪に出向くといったことに代表される。

また、この時期小田原町では、明治からの懸案であった水道の布設問題や政党政治にまつわる町長の詮衡問題、小田原保勝会による城址の保全運動のことなどに加え、昭和六年からは日清・日露戦争を体験した経験から、満州事変を「寒心にたえない」と表現した戦争・軍事に関わる記事も目立つようになる。

特に注目したいのは、交友のあった人びととの永遠の別れに際し、略歴や事蹟そして惜別の言葉を記していることである。紳士録でみると違い、小田原地域に貢献してきた人の生きた姿が彷彿される。また、歌に詠まれた風景、心情には余韻が残り、写真とはまたひと味違った奥行きのある情景を感じさせる史料となっている。

片岡永左衛門の「日記」にみられる視点

私は、特に片岡永左衛門が明治二十九年に経験した家業改革(家産の整理)が、小田原町の情景描写をはじめ、郷土史への関心を深めていく推進力になっていたと推測している。小田原宿の本陣をつとめた片岡家ゆえに、明治維新以降参勤交代などで賑わった小田原宿が、宿駅制度の改革により、物流は衰退、道路の普請も行き届

かなくなったことは、家業の進退に大きな影響をあたえることになっていった。

その様子は「(小田原) 駅は宿付の田畑なく旅客のために生計をたてていたが、明治九年以降各郡からの出入りの者少なくなり、近來旅客格外減少となり該商(旅宿)は一層困難に陥り、転業の目途もないと、明治十六年足柄下郡長に市街情況についての上申書が提出されていることにも示されている。ここには、足柄県の県庁所在地であった小田原に、当然のことながら近隣の町村からの人が集ることが日常になっていたが、神奈川県への編入を期にかけたの人びとの行き来は見込めなくなっていたことを垣間見ることができる。

それでも明治十年代には天皇の行幸啓の宿泊(明治十一年)、アメリカ大統領グラントの宿泊(同十一年)が片岡家の宿泊記録にみられ、永左衛門は明治十七年には箱根堂ヶ島に離宮建設のため宮内省御用達を仰せつかっている。それでも旧本陣片岡は明治二十一年・二十二年には箱根や熱海へでかける際の皇太子の休憩場所を提供していたが、明治二十五年からは、御用邸完成までは明治天皇の王女常宮・周宮の滞在は新興のリゾート旅館鷗盟館となった。もちろん時代の流れによるも

ので、不本意極まりないものであったに違いないだろう。『町誌』の凡例には「我が片岡家は本陣にして世々多は里正なりし為に當時の記録文書も所蔵せしに維新に際し旧慣打破の急にして古へを顧る暇まなく余又幼年にて古文書の貴重なるを思わす散逸に任せしも後に至り其誤れるを識り筐底を探れば最早失ふ処多く残るもの甚た少」なくなつて、今蒐集しておかないと近い昔もわからなくなると杞憂している。

永左衛門はこの思いのもと、自分が生きた時代をつぶさに記録していかなければならないという念に駆られたのである。そこには片岡家だけではなく、旧小田原宿・藩政を支えたさまざまな人びとの家政の変化も影響していた。明治政府は、政治・経済を中心に西欧型近代化を進めていたが、時がたつにつれ地方の社会との矛盾があらわれるようになっていた。

家業改革により小伊勢屋の東隣にあつた土地・建物を処分した永左衛門は、上幸田に引き移った。石井富之助さんは「小田原の桜」(広報おだわら連載随筆12)に「今旭丘高校と野球場の間にあるのがそれ(弁財天)である。通りの北側には宮内大臣をやつた一木喜徳郎氏や片岡さんの居宅があつた」と書いている。この一帯は

片岡家の所有していた土地だったようで、『片岡日記』によると、一木喜徳郎は息子のために、伊藤博文の父重蔵の隣地に邸を所有していた貴族院議員田辺輝実(てらぎね)を介して、明治四十年片岡家から宅地・畑・敷千四百三十坪を五千三百円で取得したようである。「片岡日記」をより理解するために、片岡家の位置について知っておくことは重要である。

もう一つ永左衛門が尽力したことにもふれておくことにする。小学校就学支援や女子の教育に力を入れたことである。永左衛門は、就学率が低いのは月謝を支払わなければならなかった当時の制度だけでなく「学校の何たるかを知らない」ことがその原因であるとしている。そのため貧生を教育し無学の人民をなくすため簡易学校の設立を進めることになる。

また、辻村(宮本)泰兄を通じて、教養を身につけた辻村家の女性達と知り合ったり、明六社の流れを汲む日本弘道会へ入会し、女子教育の必要性を痛感したことであろう。「片岡日記」の中でも、女性の社会的地位確保を進めるよき理解者の顔をのぞかせている。

徳富蘇峰との交流

なかでも、昭和期の中心的記述となつていく郷土史への視点については、『国民新聞』社主でも

片岡永左衛門職歴

明治20年4月	旧五町聯合町会議員当選、学務担任委員に当選
明治21年	簡易学校設立に尽力
明治22年	小田原町町会議員
明治23年	城跡払い下げのための臨時委員 師範学校移転請願のための臨時委員
明治26年10月	小田原農芸会幹事に就任
明治27年7月	伝染病敷地選定委員
明治28年	足柄下郡農会を設立
明治29年1月	水道調査委員として調査報告
明治29年12月	所有地を継子に譲与の為議員資格の要件を失い退職
明治29年	家業改革、地所家屋を売却
明治33年	小田原町助役に就職
明治35年5月5日	今井廣之助町長辞任につき町長職務を翌年2月25日まで代理
明治35年10月31日	海岸防波堤築造委員長、明治36年4月副委員長
明治35年12月	小田原教育会初代会長、足柄下郡教育会評議員
明治36年6月	小田原教育会副委員長
明治37年2月	出征軍人家族扶助会副会長
明治38年2月	小田原小学校植林会副会長
明治38年7月27日	助役辞職を議会在が認定
明治38年9月	藤沢銀行に就職、小田原支店支店長
明治38年9月	小田原教育会副会長・小学校植林会副会長を辞任
明治38年10月	小田原教育会幹事
明治40年	町会議員の派閥問題から派生した公金費消に関わる 告訴あり、12月和解
明治44年	関東貯蓄銀行(藤沢銀行の後身) 監査役
昭和3年2月	銀行退職
昭和9年7月	軽度の脳溢血

あり、『近世国民史』を著した徳富蘇峰の影響が大きく関わっていたようにある。蘇峰との出会いのきっかけについては、大正初期の「片岡日記」がすでに消失しているの定かではないが、現在残されている最初の記述は、大正十年十二月九日の逗子の徳富邸訪問記である。「一意之挨拶シ約束テ持参シタ片岡文書ノ副本ヲ出スト、手ニ取テ其丹精ヲ賞賛シナカラ、実ハ修史之為ニ午前八全テ面会ヲ謝シテ居るか、君ハ拙者ニ教ニ来テ被下タ様ナノテ御面会

シタカ、大部デ今日録丈ノ一覽も出来兼ルノテ暫ク借用ヲト非常ニ悦シタ」「上京ノ時間ヲ妨てもと立掛るとまあまあと止ラレテ一時間も座談シタ、談中ニハ問ルル俣ニ拙家之概略や徳富家ノ代々ノ墓地ノ事や山陽ノ耶馬溪ノ詩文タノ遂ニ先生ノ耶馬溪ノ詩ヲ揮毫スルヲ約束弥弥辞シテ廊下ニ出ルト、又見セる者ガ有と自ラ書室ニ案内された」と面会した感激を記述している。その後、大森の本邸を何度となく訪れたり、大正十四年、蘇峰

の寄付により設置された皇国思想の普及を目的とする青山会館内に設置された青山文庫へ片岡文書を寄贈している。

現在小田原市立図書館に所蔵されている「片岡文書」は写本が大部分を占めていることから、今後これらの寄贈した資料の確認も必要があると思われる。『町誌』の巻頭言や『足柄史料』の序文を徳富蘇峰に依頼していることからしても、永左衛門が蘇峰に寄せる思いは並々ならぬものがあったことがわかる。

そもそも徳富蘇峰と片岡永左衛門は同時代人で、蘇峰は文久三年(一八六三)、永左衛門は万延元年(一八六〇)生まれである。ともに明治維新という大変革が行ったのは幼少の時期であった。しかし生活の基盤となる社会状況は、幼少の彼らにとっても衝撃的な出来事であったことは間違いない。その後の「明治の国造りでは内政、外交、経済、文化、社会、ありとあらゆる分野で短期間に全階層で未曾有の変革が行われ」「数世代分の凝縮された時間を生きてきた明治人の多くにとって、明治天皇は歴史そのものであり時代の象徴であった」(『日本の歴史21明治人の力量』)のである。その明治天皇の崩御に相前後して、蘇峰は同朋であった桂太郎の死、永左衛門は公職を退くとい

った自らの人生の転機に直面し、改めて自らの生きた明治という時代、すなわち明治維新とは何であったのかを記述しておかねばならないという使命感を背負った共通点があったと思われる。具体的に見ると、蘇峰は大正七年頃からライフワークになる『近世国民史』の執筆に、永左衛門は『町誌』の執筆に向かうことになる。ところでこの二人を繋ぐ人物があったとしたら誰であったのだろうかという疑問が浮かぶ。そのキーパーソンとしてあげられるのは、前述した二宮尊徳五十年祭資料の収集をしていた際、永左衛門に助言を求めていた内務省嘱託の留岡幸助であろうと思われる。

留岡はキリスト教者として知られ、同志社で新島襄の教えを受けた人物で、日本の社会福祉の先駆的施設感化院や家庭学校を各地で経営した。と同時に中央報徳会の設立にあたっては一木喜徳郎らと発起に携わり、明治四十年八月に小田原で開催された大日本報徳会夏期講演会には主導的な役割を果たした。また、蘇峰の弟に当たる徳富蘆花と交流があったことでも有名である。

留岡は一九三一年蘇峰との会談中に病に倒れたことから推測すると、永左衛門を蘇峰と引き合わせたのは、留岡であったのでは

ないかとするのは想像に難くないところである。

片岡永左衛門の略歴

片岡永左衛門は万延元年(一八六〇)片岡家十四代目として出生、名は正樹といった。永左衛門は世襲名である。父は片岡翁之助正親、母はつま子。父正親は、明治二年取締役名主、明治三年閏十月十日まで小田原藩商社御用御手助を努めた。また甲府(道志村)中川村間新道開鑿をして小田原から海路江戸への道の確保のため、吉田専助と共に私財四百両を投じたりもしたが廃藩により中止した。

このような事業とは別に、国学者で歌人でもあった吉岡信之に師事し和歌を修めるといった文人の側面も備えていた。永左衛門は子どもの頃から和歌に親しむ環境にあったからか、後に大正十三年の宮中歌会始めの詠進歌に応募して次席の榮譽を得ている。「片岡日記」にも多くの歌が記されたためられている。

永左衛門がどのような教育経歴があったかは定かではないが、旧城内小学校に永左衛門の卒業証が残され、『小田原近代教育史』第一巻の口絵に使用されている。

これによると、明治六年六月に開校した第一番小学(日新館)で九月に下等七級八級を卒業した

とある。この時永左衛門十三歳九月、当時の小学は八年間、下等の後は上等一年の就学ができたが、年齢は十四歳までとされていたため上等に進むことはできなかったであろう。日新館は学制前から旧藩の藩校文武館を改名して明治五年から士族以外の入学を認めていたことから、すでにここで学んでいた可能性はある。また、一丁田の豪商辻村家のように、士族以外の入門を許した中垣秀実の謙塾に子弟を通わせていた例もあることから、このような塾で学んでいたのかもしれない。

明治十年正親は死去、永左衛門は十七で家督を継ぐことになった(母つま子は明治四十四年一月逝去)。その後のおもな明治期の職歴を『町誌』などからみると前頁表のようになる。

また、『小田原史談』には「銀行支店長を勤めた片岡永左衛門さん」(二五九号)、「片岡永左衛門夫妻の墓」(二七八号)が掲載されているのであわせて参照して頂きたい。

今後史談会の手により、昭和期の「片岡日記」の解説がすすめられることで小田原地域の昭和史に、より多くの情報が提供されることを期待したい。

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

十年ひと昔で、私の旅日記も昔の思い出話のようになってしまいが、今回も友人二人との土浦佐原方面へのバス旅行となった。小田原駅より海老名サービシアで休憩のあと、首都高速で大分渋滞にあい桜土浦を経て土浦城跡、市立博物館見学や古い町並みを歩き、江戸時代中期に建築された見世蔵、袖蔵などの「土浦まちかど蔵」を見ることが出来た。街道を行き交わしたのであろう、町人のさざめきが聞こえるような思いだった。

昼食後は予科練記念館見学。幼な顔の残った若い日本男子がお国のため、飛行機と共に尊い命を散らした人達の写真や、父母に宛てた手紙など見て涙をそ、るひと刻だった。潮来町へ来て立派な臨済宗長勝寺を参拝した。その頃はもう薄暗くなっていた。宿泊する潮来ホテルは利根川の近くに建つ瀟洒なホテルだった。

翌朝八時過ぎホテル出発。佐原山車会館へ。山鉾、人形、鳥獸、草木など飾った屋台が会館いっぱい飾られそれはとても見事だった。其所より歩いて伊能忠敬記念館へ。五十歳すぎてから日本全国を測量して歩き、わが国最初の日本地図を造りあげた人物である。伊能図の完成までの数年を紹介され、実に立派な人物だったと実感した。伊能忠敬の旧宅は国の史跡に指定されているそうだ。商業で栄えた佐原の町並は、小野川沿いには柳が風になびき、中々風情があり、往時の面影を残す土蔵造りの商家や、千本格子の町家が建ち並ぶ小江戸の情緒が漂っていた。

せせらぎに日のまだ残る螢草

私はこのような町並が好きで何時までも眺めていたかった。昼食後香取神宮へ。利根川を隔てた鹿島神宮と並び称され、下総国一の宮として古くから多くの尊信を集め、軍神として崇められた。祭神は国譲りの神話に登場する経津主神(ふつぬしのかみ)である。

会釈して社殿を去りぬ百日紅

今回は土浦まちかど蔵を見学し、伊能忠敬記念館では立派な人の意志の強さと、努力に感動し佐原の情緒豊かな町並みに心が癒され、充実した素晴らしい旅であったと嬉しく思ったのである。

片岡日記 昭和編(一)

片岡 永左衛門

昭和二年一月

一日 晴

例二より早起、細君と堀端より新築の*第壹小学校の横より国道に出つ、此間式十間はかりは未夕道路未完。幸町式と参の間を御幸の濱ニ出て初日を拝し*大行天皇の未夕東宮に在せし時、此濱にて網曳を御覧ありしを思ひて
いてませし昔のあとの偲はれて
よせくる波の音のさみしき

町の人も今朝は殊に多く初日を拝すれば

つとひ来て初日をろかむ諸人の

在しむかしを知るやしらすや

帰途は代官町ニ入りて、震災前より道路も廣かりしと雖も、いまた狭く復興も幾分行れし心地す、右の小路ハ無量寺の門前にて以前ハ廣く思ひしニ今ハ他の廣くなりし為め殊に狭くも思れ本堂も其儘なれは見違うまでなり。国道に出れハ闇より明る見(ママ)に出し如く道路も廣く完成。去る焼失の家も建築に懸りしも有るハ火災保険の御陰なるへし。松原神社ニ参詣して帰宅。
本年ハ賀客も有されハ午后より史蹟踏査にと鴨の宮にし(ママ)下車、川土手通り酒匂二出、橋を渡り*昔の道路なるへき地を踏査し得る所ありて四時帰宅す。

*第壹(一)小学校 当時は第一尋常高等小学校、本町小学校をへて、現在は三の丸小学校。

*おろかむ 拝む
*大行天皇 天皇の死後まだ諡(おくりな)の贈られない間の呼称。
*昔の道路 酒匂の渡しの日東海道のことか。

二日 晴

十時発にて淳子と上京。龍夫ハ信州へ友人とスキーニ行き不在。大竹新兵衛病氣よろしからすと聞き、きよと見舞ニ行き親一方ニ止宿。

三日 晴

母の*正月命日なれば増上寺ニ至り回向を済し心光院ニ立寄、幸ニ在院にて戸松氏と閑談ニ時を過し、四時半品川より乗車六時半帰宅。

*正月(しょうつき)命日 祥月命日(一周忌以降の人の死んだ日と同じ月日)。正忌。

四日 晴

午前九時出勤三時帰宅、夜ニ入り親一帰省。

五日 晴

親一と大蓮寺ニ墓参、帰途尾崎ニ立寄、親一ハ十二時にて帰京。

常ハ炬燵(こたつ)にても入り読書にてもなし□□と思ひ□□れ、炬燵にて読書してみるとまた落付て心静に庭にてなかめ度なる、向を替て庭先より城山を見る、しはらくすると散歩でもし度なる、可笑なる迄て心も動くもの。外套を羽織、鉄橋を渡り線路ニ添て、道了鉄道の仮停車場迄散歩し、廣小路通りニ出、裏組より又線路ニ添て小田原停車場にて乗降の人を見ながら帰宅す。
今年八年の始なるも来る人もなく甚寂寥。

凡例

- 一、漢字は原則としてJISコード第一、第二水準漢字を用いるが、旧字体はおおむね原文のままとし、また、固有名詞もおおむね原文の通りとした。
- 二、異体字は正字に直した。
- 三、明らかに誤字と思われるものは正字とした箇所もあるが、おおむね(ママ)と付記した。
- 四、読解不明の字は□とした。
- 五、原文に句読点はないが、句読点を最小限施した。
- 六、変体仮名は「かな」とした。
- 七、語句の説明はその日の終わりに付けた。
- 八、部分的に二案記述されている和歌は、該当部の右横に線を引き、両案を併記した。(二月五日「このま、を…」の和歌参照)

年立てと人もとひ来すかしこくも
物たらぬまで静かなりけり

*道了鉄道の仮停車場 大雄山線の昭和二年四月に開業の「新小田原駅」の仮停車場のことか。

六日 晴

本店ニ行三時帰宅。夜ニ入り下女の行きさう(ママ)ふなれは年越参りニ行く、出掛に孫女と連れ立つ格(かたち)なりと一同と笑ふ。今夜は思の外ニ淋し。

七日 雨

八日 晴

司法省内喪失国債証券審査會ヨリ呼出ニ付、小田原区裁判所ニ出頭。*道徳教會所有公債、震災で焼失ノ件ニテ証人トシテ問有り。

・道徳教会 日本弘道会小田原支部の会員、小田原報徳社員、足柄下郡の仏教僧侶の道徳教育活動の関係団体が大同団結することになり、明治四十二年に「小田原道徳教会」が誕生した。命名の由来は弘道会の「道」と報徳社の「徳」、「宗教教育」の「教」を合わせて「道徳教会」と名付けられた。
 (小田原市史・通史編「近現代」)

九日 晴

さて今日はたれをかとわむ東にか
 西にかゆかむ日よふの朝

佐々木君ニ至り借用之書籍を返し、尾崎ニ立寄り帰宅。午后笠原氏を見舞ふ。

十日 晴

帰途吉田君ニ見舞ニよる。小供の病気大ニよし。

十一日 雨

・足柄病院ニ至り久々にて沢崎老人に面會。八十一の高齡なるも驚くはかりの壮健。

・足柄病院 山角町(現在の南町の南消防署の北側付近)にあった。

十二日 晴

三橋、近田、山下三氏塔之沢の帰途ニ銀行に立寄。

昨日

雨さむく小くらき庭の植込の
 しけみに赤き南天のみの

十三日 晴

十四日 晴

十五日 晴

松原神社の例祭なるも諒闇中にて神輿の渡御も無くて淋し。夜ニ入り大風雨。

・諒闇 (「まことに暗し」の意) 天子が父母の喪に服する期間。その期間は一年と定められ、国民も服喪した。

十六日 晴

佐々木庄藏氏来談。
 植松未亡人久々にて来訪、和歌を乞ふ。
 とる筆のあゆみも重し己れのみ

獨りたのしむ歌を乞われて

今日は下女も里に遣し、細君は露木の帯祝にゆく、淳子も外出し獨り留守せしに日は暮とするも誰も帰り来ず。淋しきあまり

人まては門をすきゆく足音も
 もしやとたちて耳をかたむく

十七日 晴

十八日 曇

十九日 晴

廿日 晴

今朝ことに寒し。

廿一日 晴

重役會にて本店ニ出張、五時帰宅。

廿二日 晴

廿三日 午后より雪。

史料採収ニ入生田に行。
 風さむしつき屋にひく水車
 めくりなからも白ろく氷れる

今日は板橋の地藏尊の縁日にて参詣人混雑す。以前は村落より来る老婦人の多くは、しほりの腰巻に尻をはし折り、正月は寒き為に頭巾を冠り手拭にて頬冠(ママ)りをなし、中には長き煙管を腰にさしたるもあり。若きは白き腰巻に尻をはし折り、男も頬冠りし、中には濃き浅黄の、もうろく頭巾を冠るも多く、何も尻はし折に草鞋なりしに、今は長き外套を着し洋服も少なからず。婦人は老若ともいろくの襟まきにコート多く、都人と余り変りもなく徒歩したるに引替、電車自動車に乗るも驚くはかり雲泥なり。

月の廿日頃より次第に寒く葉り湯に入りて
 まれなりし今日の寒さを葉り湯に
 わすれて春のこ、ちにそなる

・じほり 絞り染め。

・もうろく頭巾 焙烙(ほうろく・平たい形の土鍋)の形をした頭巾。僧侶、老人などが多く用いた。

廿四日 晴

廿五日 晴

廿六日 晴

廿七日 晴

熱海露木老母死亡ニ付會葬、午后四時帰宅、流石ニ熱海も寒し。

廿八日 晴

廿九日 晴

此頃毎朝・三十度前後の寒さにて夜中に手首冷へ執筆も思に任せず。

・三十度 華氏三十度は、摂氏マイナス一度。

三十日 晴

午前佐々木氏を訪問、午后東京より・沼田頼輔来訪、史談数刻、帰途停車場迄送る。

・沼田頼輔 慶応三年(一八六七)〜昭和九年(一九三四)。神奈川県宮ヶ瀬村出身。紋章学、歴史学者、日本考古学会副会長を務める。

三十一日 晴

午前三時半出火、新玉新道四十四戸焼失したか、近來は保険の発達した為に被保険者多く思ひしより損害の少なかりしハ何よりの事なり。

二月

一日 晴

今朝は少し暖気。

*東久邇宮も弥、御帰朝になれり、當宮は長々の御外遊にて、先帝の御病中も御帰朝の御様子もなく種々芳しからざる風聞も傳り、甚た御身分として遺憾なりしか、先は御帰朝にてよろしかりし。

・東久邇宮 明治二十年(一八八七)〜平成二年(一九九〇)。久邇宮稔彦(なるひこ)王。フランスに留学。終戦直後に総理大臣を務める。

二日 晴

三日 晴

昨日より幾分暖気。松隈義旗より、

賀金婚式 十八里□□

金婚賀宴正□中甚偉童顔媼與翁盛運如山長不動城西李子並峰□。

礼状に添て 動かさる我家の末は兎も角も 山にも比せむ君か齡ひを

四日 曇

帰途借用の書籍返却に佐々木氏に行むと箱根口に至れ、忠魂碑を建設有りし・渡り櫓跡の石垣を取崩中なり、去月ハ幸田門口の石垣を取拂ひたり、かくして道路は廣くなるも旧観は追々跡形を失ふ、昔もかく今もかくなり。

・渡り櫓 箱根口門は渡り櫓であった。

五日 雪

御大葬も接近したれ、此處数日は快晴を祈りしに、昨日の曇天は今朝遂に雪となる。晴る、を祈りしそらのさら〜と

家根に音して雪のふり来ぬ

小草のうゑに雪の積りたるの面白さに

このま、を絹にうつして着てみたし

小草に積る今朝のあわ雪

寒き日に女の米とく手をみて

米洗ふ女子の手首いと赤し

空さむき日のせとの川へに

六日 晴 流石に立春之雪夕刻は大部に解く。

七日 晴

午後十時半大葬、遥拝場第一小学校二なる。校庭二齋場ヲ設け祭壇ノ前二ハ・庭燎ヲ焚き十一時より開式。

神官大祓詞、次大祓行事、次二遥拝の詞奏し了テ一同最敬礼。参列者凡三千人。町中ハ弔旗奉悼の・白張提灯を出す。

・庭燎 庭でたく篝火。特に宮中で焚く。

・白張提灯 白張の紋や文字などの書いてない提灯。葬式に用いる。

八日 晴

午前五時半遥拝所二至る。挙式昨夜の通り、今朝ハ参列千五百余人、六時開式六時三十分了ス。午前史料蒐集二外出、午后は在家執筆。

九日 晴

寒威相不変、七時室内三十度。

十日 晴

出勤。午后、岡田小三太大患ノ通知接し直二行く。

・岡田小三太 山角町にあった足柄病院の病院長

十一日 晴

午前七時半岡田小三太死去。四時帰宅。午前九時岡田氏二出直し、午后十時帰宅。

十三日 晴

葬儀準備二岡田氏二至り、午后八時帰宅。

十四日 晴
十二時半出棺、二時より三時迄告別、火葬場ニ送る。五時より藤館にて諸親類忌中拂、無事散會八時帰宅。

十五日 雨
岡田氏骨揚。十一時より藤館にて忌中拂、三時無事散會帰宅。

親友岡田小三太君ハ医科大学を出テ長崎医学
校長兼病院長ニ就職セシカ、高橋是清氏のヘ
リウニ銀鉦ヲ計(ママ)營スルニ當リ医師長ト
シテ渡航ノ為メ辞任セシニ、該鉦山ハ廢鉦ナ
ルヲ有望如ニ粧ヒ全ク欺偽ナルヲ發見シ、事
業中止ナリシ結果小田原ニ来リ。個人トシテ
病院を設置シタリ、當時ハ未タ医業發達セス、
病院ハ勿論学士トシテハ當地最初の開業ナル
ヲ悦ビ、其業務後援者ノ第一人者トナリシト。
氏ノ温良篤実ナリシ為メ、良友トシテ隔意ナ
キ交りをなせしニ長逝し甚夕寂寥を感セリ。

十六日 雨
辻村清之助ニ立寄、四時帰宅。

十七日 雨
役場ニ立寄出勤。

十八日 晴
第一師団經理部長陸軍主計監香山剛毅氏一行
十五人来原、町役場にて小田原城跡ニ付一時
間半講演了テ紀念の写真す。

十九日 晴

廿日 曇

廿一日 曇

廿二日 雪

廿三日 晴

十九日以来風邪、本日出勤、午后帰宅。

廿四日 晴

此程の*国民新聞ニ*徳富蘇峰先生の皇族の御
外遊にの一文か有るか御前(ママ)もの事と思ふ。
東久邇宮の御外遊中に御不謹慎の風説類りな
りし為なるへし。拙者等国民も汗顔之思ひな
りし。

*国民新聞 徳富蘇峰が明治二十三年(二八九〇)
に創刊した日刊新聞。現在の東京新聞の前身の
一つ。

*徳富蘇峰 文久三年(一八六三)〜昭和三二年
(一九五七)。本名は猪一郎。明治、大正、昭和
にわたるジャーナリスト、歴史家、評論家。太
平洋戦争前の日本におけるオピニオンリーダー
であった。

廿六日

昨夜より雪、本店ニ行く、三時帰宅。

廿七日 晴

廿八日 晴

(つづく)

キャンパスおだわら学習講座《公募型市民企画講座》 《小田原史談会歴史講座》

歴史講座 『小田原史談会セミナー』 第8回

日時：平成27年2月28日(土) 午前10時～12時

場所：小田原市民会館 5階 第3会議室

講座：『南北朝期の東国の争乱を考える』 講師：杉山 虔一 氏

申込先： ☎33-1890 (小田原市生涯学習センターけやきの会) 定員50名(先着順)

費用：500円(資料代含む) *前回予約の方でキャンセルの場合は上記に電話をお願いします。

小田原の郷土史再発見

江戸の遊廓「吉原」開設者

庄司甚右衛門は小田原出身！

石井 啓文 ひろ ふみ

東京は台東区の遊廓「新吉原」跡地の吉原弁財天に、「花吉原名残碑」(はなのよしわらなごりのひ)と「新吉原開基碑」がある。

後碑は、吉原を開いた庄司甚右衛門の顕彰碑とも言えよう。

庄司甚右衛門は小田原の出身か

甚右衛門については、小田原出身をはじめ、駿府遊女屋の主人・駿河吉原の宿屋主人の三説がある。斎藤月岑は嘉永元年(一八四八)脱稿の著書『武江年表』で、次のように言っている。

「文祿元年(一五九二)壬辰

吉原傾城町(けいせいまち)の開発人庄司甚右衛門は、北條家に仕へし者の子なり。父果てて後小田原落去あり、其の頃年十五歳にてありしが、家来の介抱にて江戸へ下り、所縁のものにちなみて居住しけるが、成長の後傾城町開基の事をはかり、官許を得て廓をひらけり。尚元和の件(くだり)にしるせり。(中略)

筠庭(きんてい)云ふ、吉原開基の事は別に論あり。(後略)」

「元和三年(一六一七)丁巳

○庄司甚右衛門(小田原産、初名甚内)、官許を得て遊女屋を一ツに集め、花街を葺屋町(よしやちやう)の末に営なむ。翌年十一月普請成りて舖

(みせ)を開き商売を始め吉原町と号す(『そごろ物語』に云ふ)(中略)

○甚右衛門渾名(あだな)をおやちといふ。吉原開発の事にあづかりしもの皆壯年なり。甚右衛門は四十に越えたるをもてかくはいへりとぞ。親仁橋(おやじばし)も元吉原道路のため、願ひて掛けたるなり。甚右衛門が伝『洞房語園』等に出でて、世人の知る所ゆへこゝに略す。

筠庭云ふ、『見聞集』巻七、『そごろ物語』にいへるは、庄司甚右衛門が事とは見えぬ、(中略)『落穂集』にも、慶長五年以前葺原(よしわら)町の事をいへり。然れば甚右衛門は其の後願ひて再興したるな

り。右に和尚と号するといへるは、上色の遊女をいへり。又云ふ、思案橋は今の思案橋なるべし。(後略)」

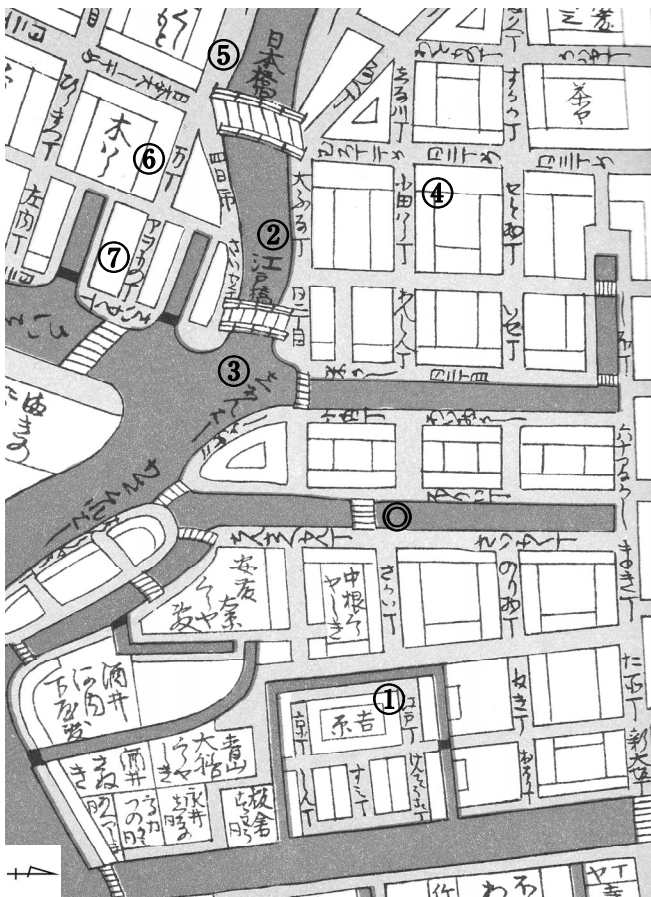
庄司甚右衛門は、「小田原産」とある。

『洞房語園』とは、享保五年(一七二〇)に甚右衛門の子孫・庄司勝豊(又左衛門・勝富とも。寛文八年(一六六八)〜延享二年(一七四五)が書いた、全国の遊廓調査報告書とも言えそうな内容の書物である。

甚右衛門が最初に開いた「吉原①」の地を左図に示した。

「當時、江戸橋(②)の方より葺屋町へ渡る橋を思案橋(③)といふ。本名親父橋といふ。これ庄司甚右衛門廓への都合よき様にとて懸たる橋也。されは諸人廓へや行ん宿へや歸らんと案するとして、俗に思案橋と呼来れりとかや」(『洞房語園』)

左図は思案橋を記しているが「親父橋」が本名だという。後年の地図には思案橋の右手(◎部)に親父橋を記している。その上(西)に小田原丁(④)、日本橋(⑤)左手(南)に万丁(⑥)・アラもの丁(⑦)がある。



承應年中元吉原方角圖 (『新吉原史考』より)

日本橋の南北端には、小田原地名からの所縁が多く見られる。

「親父橋」は明暦以前の地図にはなく、以後に甚右衛門の後代が架橋したと言われている。前記記述が正しければ、甚右衛門架橋のときは親父橋であったが、「思案橋」と呼ばれるようになったことから新たに「親父橋」を架けたものと考えられる。

「庄司甚右衛門、出所は相州小田原の者、父は北條家の御内に僅なる御扶持を蒙り、輕き奉公相勤候由、父果て後天正十八年、小田原落去の節、甚右衛門年十五歳、家來の介抱により御當地へ罷越、柳町に所縁有りてこの所に住居しつるが、傾城屋になりて耻かはしく思ひけるか、一生其事をあかさず別に相知るものありて、子孫に語り聞せたり。甚右衛門が姉は、おしやうふ(和尚婦)と云ふて、北條家の愛妾なり。正保元年甲霜月十八日、甚右衛門六十九歳にて終る」(『洞房語園』)

『武江年表』の参考文献と分かるが、父は「北條家に僅なる御扶持を蒙り」と記し、「一生其事を明かさず」ともある。

北條家の『小田原衆所領役帳』に庄司姓はない。「僅かなる扶持」とあるから『役帳』に載らない下級の身分だったのであろう。

『北條五代記』は、甚内(甚右衛門)を「風魔」として描いている。風魔とは隠密・忍びの者で、家臣名簿などには載らない。

また、甚右衛門姉で和尚婦という上級遊女が「北條家の愛妾」とあり、これを北條氏政側室とも記しているが、どうであろうか。「氏政側室」は勝豊の筆が滑ったか、家臣の愛妾ならば考えられよう。

そして本人が「父祖のことを明かさず」とあることから、駿河や駿州吉原説は本人が詐称したことがあったかも知れない。

庄司甚右衛門の墓

台東区役所が刊行した『新吉原史考』(昭和三十五年十二月・刊)は、「吉原」を文化史としてとらえている。

同書によると、甚右衛門は天正三年(一五七五)三月二十八日相州小田原で生まれ、正保元年(一六四四)十一月十八日、六十九歳で没した。この生年は没年からの逆算であるが、天正十八年・十五歳と一致する。

また、三月二十八日は、『洞房語園』の「毎年誕生日だといって親類を招きご馳走していた」という記事からであるという。

小田原を出た甚右衛門は慶長五年、鈴ヶ森で茶店を開いた後、柳町で遊女屋を開業した。同十年、柳町が御用地となり元誓願寺前(神田白銀町

か)に替地を命ぜられた。

同十七年、甚右衛門は傾城町創設を願ひ出、元和三年、日本橋葭屋町に二町四方の土地を与えられ、甚右衛門を惣名主として傾城町創設が許可された。

寛永三年、葭原を吉原と改称。明暦三年、移転を命ぜられ浅草寺裏日本堤に新吉原が開業した。

甚右衛門は新吉原開業前に他界したが、子孫は代々町名主を継ぎ、廓入り口の大門を入れてすぐ右側の江戸町一丁目の角で「西田屋」と称していた。同屋号は、柳町の頃から言っていたものか、新吉原で称したかは判明していない。

『新吉原由緒書』によると、甚右衛門の子は甚之丞、その子は又左衛門、その子も又左衛門。二代目又左衛門が勝富とい、道恕斎と号し享保十年、奉行所に命じられ『新吉原由緒書』を書いたという。

勝富は前述の勝豊とも称し雑文・俳諧をよくし、享保五年『洞房語園』も著している。ただ、この勝富の時代、延享四・五年(二七四七、八)頃、西田屋の廃絶がうかがえる。その後の絵図等史料に西田屋が見られないのである。理由も全く判明していない。

甚右衛門は馬喰町の雲光院に葬られた。同院は慶長十六年に家康の側室・阿茶局の開基で、明暦の大火後神田に移り、天和二年再度焼失し、深川三好町の現在地に移り「庄司墓」とある。

◎庄司墓

龍徳山雲光院(江東区三好二丁目)

(正面) 寛永九壬申八月七日

清譽浄信士

見譽俊信女

安五〇〇十五日

玉譽見龍信士

天譽清信女

〇〇〇〇西十二〇〇〇

(左側面)

正保元甲申十一月十八日

願譽浄心信士

淨譽清心信女

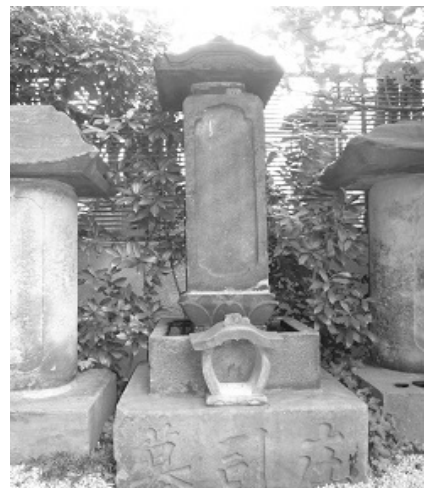
妙正信女

霜幻童女

新吉原仲之町施主箕浦四郎

良心信士

深譽倍誓信女



雲光院の庄司墓
(江東区三好)

(右側面) 寛永六己巳三月十一日 午十一月□□ 正月廿二日
 久成院宗將 生譽□然信士 三月廿二日
 法□□□□ □譽宗□信女 延宝七
 寛□□□□□ 二月 妙譽光月女
 八月十七

ただ、どういわけか庄司家『過去帳』は、現・足立区大谷田町の正
 憶院所蔵とある。両寺とも浄土宗で、当時の住職は囲碁友達であったと
 いうが、墓と過去帳が別々の理由は分からない。

過去帳の記述を引用する。(『新吉原史考』より)

「正保元甲申年改元十二月廿八日 願譽浄心信士 十一月十八日 庄司甚内事
 享保十一丙午年 遣譽順清普仰信女 八月晦日 庄司又左衛門妻

享保十三戊申年 順譽清國惠春信尼 五月十七日 江戸町 庄司又左衛門野村又右エ門母五十六

享保十六辛亥年 寶譽樹慶信女 十月九日 江戸町 庄司源兵衛妻

「願譽浄心信士」が、唯一墓石と一致し甚右衛門と分かる。

墓石の「浄譽清心信女」が甚右衛門妻であろう。過去帳の「順譽清國
 惠春信尼」は又左衛門母とあるが、年代から二代目又左衛門母であろう。
 墓石正面上段の信士・信女が両親と思えるが、甚右衛門は小田原を出て
 きており、両親を埋葬したとは考え難いし、父親は小田原落城以前の死
 去を記していた。年代も「信士」は寛永九年とあり父親の可能性は低い。
 下段の信士(延宝年)・信女は甚右衛門(正保元年)の後である。これら
 正面の法名は誰であろうか。また、甚右衛門法名が左側面で「施主箕浦
 四郎」とあるのをどう解釈すれば良いのであろうか。
 こんなことを考えていたとき、本会内田清氏から明治三十二年刊『風
 俗画報一九二号』収載の「如電入道の話」を教えられた。

明治時代の新説と「道了大薩埵」道標

「道了大薩埵御供會

如電入道の話

小田原の道了さまと云ふとは。久しく耳にしますが往た事は無い。所
 で淺草に吉徳講といふ講中がある。この講の世話人に北村忠助といふ

老人がある。本年六十九歳で茶人で花が大層得意な翁さまです。入道
 とは年來の懇意で時々出會しては茶ばなし花ばなしなどやります。今
 年五月或る處で逢ひました時に。道了様の話しがで、是非御参詣を
 願ひますと云はれ。二十八日の御供會(くゑ)に同行する事に、約束し
 ました。(中略)

吉原の廓は。道了様とは大變深い因縁のある事。講中としては恐く
 は第一番ふるいらしい。其子細は吉原遊廓の開基は誰も知てる庄司甚
 内。其實父は塚原村の者で三枝小八と云て北條家に仕へ。小田原没
 落の後は居村の庄屋に成り。子の甚内は江戸へ出て。吉原の遊廓を創
 立した者である。夫故に父子共に道了權現を信仰して居たから。吉原
 遊廓では抑もの始めより。廓内一同が商賣繁昌の御祈禱として此寺で
 大般若經の轉讀させた者である。北村の家に元和の古文書がある。序
 でだから讀まう。

一金貳拾五兩也

右新吉原爲營業繁榮大般若祈禱寄附奉納髓に受取申候
 以上

元和三年四月

相模國狩野庄 最乗寺役寮

名主甚右衛門(甚右衛門は甚内の改稱)

この時代の二十五兩は。今日の二千五百圓にも向うだらう。夫れから
 寛文五年七月付の受納書には。町内安全として銀三百目、杉苗料錢三
 十八貫文奉納とある。此他萬治・延寶・貞享・元禄・享保・天明・文
 政・天保などの受取證が。都合拾六枚ある。是だから元來は吉原講と
 云たが。維新の初に賤業者が殊勝にも自ら憚って。吉徳講と改稱し。
 講元も山谷の料理屋八百善に譲た。これは八百善と吉原の見番大黒屋
 とは親類だから。講元の名義をふり替たのだと云ふ、こと。序でだか
 ら話すのだ。北村は祖父の代から二代引續き世話人だ」

(原文の味を損なわないう、句読点等原文のままとした)

この塚原村三枝説は新説である。前記『小田原衆所領役帳』に三枝姓
 もない。同村名主家としての三枝姓も知られておらず、既述史料は、甚
 右衛門父は小田原落城以前の死去を記していた。

「居村の庄屋に成り」は話が合わない。ただ、筆者勝豊も「父の死去」
 を確実な話として記したかは疑問の余地もあろう。

南足柄市の大雄山最乗寺仁王門脇に、新吉原講の人たちが建立した「道

了大薩埵」道標と、その由来を記した碑がある。その「由来」碑に「莊司甚左衛門」の刻銘がある。

「大雄山吾道了大薩埵垂跡聖地應永十八年三月二十八日始祀之於別峰靈驗顯著賽者如市元和年間江戸莊司甚左衛門糾合同志交盟締幼名曰新吉原講社爾來二百八十餘年勝業繼續歲時登山崇敬尤厚天明二年三月社員戮力建道標於州之國府津而作登賽者之指針其後星霜經久殆屬廢毀乃明治十三年五月重建之焉然三十五年九月二十八日其地俄然罹海嘯災道標崩壞無復存舊觀者於是社員相謀更卜勝地移之於松田驛亭之傍補修經營不幾告竣時明治三十六年癸卯五月也予仍經紀事由且爲之銘曰

志相屬 三百年 禱有驗 豈偶然 東京 本所區石工 鶴川勝太郎
大雄山最乘護國禪寺獨住第五世牧牛素童撰 榎本重次郎

(裏面) 講元 赤倉康三

再建發起人 田村千代/村越松五郎/埼玉正二郎/芝崎周次郎/田村喜太郎

垂跡(すいぜん)とは、仏が衆生を救うために姿を変えてこの世に現れること(広辞苑)という。概略次のように読みとれる。

元和年間に江戸の莊司甚左衛門が同志を募り、「新吉原講」を結成してから二百八十年余も継続してきた。天明二年(一七八二)には國府津(鷹野橋袂の所)に道了大薩埵の道標を建てた。

その後、明治十三年に傷みが酷いため再建したが、同三十五年の海嘯で崩壊したことから、翌年五月に、国鉄御殿場線松田駅の傍らに由来碑と共に再々建したという。

「甚左衛門」は誤刻であろうが「莊司」は庄司であり「莊園領主の命を受けてその莊園を管理する職」(広辞苑)とある。後の庄屋である。

甚右衛門は実父が庄屋になったのを知り、「庄司」と改姓したとも考えられる。

『新吉原史考』によると、庄司家は既述の甚右衛門子孫・勝富が、甚右衛門以来続いてきた「西田屋」を閉店したと記し、その後の甚右衛門家の消息は記述がない。墓石にしても前述の一基のみが墓地ではなく本堂脇に残るのみで、御子孫のその後は判明していない。

こうしたことから、由来碑發起人の五名も甚右衛門の詳細を知らず、名前を誤刻したのではないだろうか。

とは言え、發起人田村千代を除いた四名が道標再建発起者でもある(道標銘文)。由来碑建立は画報出版の四年後である。

さらに道標再建世話人で願人代表が、如電入道を最乗寺に誘った北村忠助である(同標銘文)。彼らが「如電入道の話」(画報記述)を知らない筈はないだろう。何故、そのことを記さなかったのだろうか。疑念を禁じ得ないが、江戸っ子の彼等には「塚原村」や「三枝」姓については、それ程の重要性を感じなかったのかも知れない。

そして、「北村家に最乗寺の寄付金受取証が十六枚もある」ことは非常に興味深い。

(「道了大薩埵」道標と由来碑は、『史談足柄三五集』が詳細を記している)

まとめ

『風俗画報』の記述は、地元の塚原にも知られていなかった。新吉原の地元・台東区に問い合わせたのが、初耳で分からないと言われる。

地元(南足柄市)に伝承されていなかったことを、他所(と言っても第二の地元)の人が記している。しかも、そのことが今日まで庄司甚右衛門や吉原研究者等にも見落とされてきた。

極めて珍しい事例と言えよう。

如電入道は、明治から昭和初期の学者で著述家の大槻如電が浮かんだが、彼に出家の形跡は見られない。新吉原近辺の有力者であったろう北村忠助や、塚原の三枝小八を検証したく願っている。

先にも述べたが、甚右衛門は実父が庄屋になったことから「庄司」を名乗ったことが考えられる。これが立証できれば四百有余年の謎が解けることになろう。

(おわり)



松田駅近くの道標碑と由来碑

宮之前的山田呉服店(上)

話し手 山田 影夫さん

さつきまでね、松原神社の明神会が設立して二十周年になるっていうので、神社の御輿をぐるぐるって廻して浜降りを御幸の浜でやってきて、もうちよつと前、一時過ぎに御輿が納まったところよ。家の前でずつと太鼓叩いていたんだよ。

ああ、その(橋本)樸々先生の絵かい。まあ、あの方に会ったときは、本当に坊さん以上に坊さんだと思つたよ。そういう絵なんだよ、あの人の。ホトケがホトケを描くんだからねえ。久野の東泉院さんが新九郎で樸々展やったとき一つ買ったんだ。それを樸々さんが届けてくれたときに、他にも絵をくれたんだよ。それで貰いっぱなしにしておけないから、後で紺無地の作務衣を持って先生のところにお礼に行つたんだ。そ



したらね、箱の中に絵がいくつか入ってた。この中からあんた好きな何枚

でもいいから持っていけというわけよ。それで三枚か四枚貰つて店に置いたら、店に来る人が「あれは何。いい絵だな、棟方志功か」って言うんだよ。そうじゃねえ、こういう人だつて。そうしたら「一枚くれよ」「一枚くれよ」って、とうとう私が貰つた絵は一枚も残っていない。

養子三代

俺はあと一ヶ月で七九歳、昭和十年(一九三五)生まれ。

うちは明治八年の創業で、今では小田原が一番古い呉服屋になつちまつたさ。以前は竹の花に添田という呉服屋があつて、そこがふるかつたんだけど、私が二十歳の頃にやめちまつてね。

うちの先祖は小田原の網元の山田又市の分かれで、三代続けて婿なんだよ、婿養子で、親父も祖父さんも、ひい祖父さんも続けて婿養子なんです。

私の家から間口十八間が、みなさんご存じの通り本陣の清水金左衛門、「大清水」の跡地で、ここが門の位置。間口は四間で奥には玄関があつてね。昔の殿様が宿

に入るには、駕籠ごと敷台まであがちゃつたんだ。そのように敷台が出来ていて、それを明治五年に本家の山田又市が買い取つたんです。

今の籠清の駐車場があるでしょ。その隣に柳川という家があります。これも我々の一族なんだけど、そこからずーつと海岸で、西湘バイパスを越えた砂浜まで又市が持つていた。船上げ場に砂浜を使つていたからね。

私が戸籍を見てびっくりしたのは、明治六年の二月に、「又市妹、又市長女コト、小田原町幸一丁目二百三十六番地に戸籍を開設する」と、昔の戸籍にそうなつてました。

又市妹、又市長女と書いてある。何だろ、こりゃあと思つたら、代々又市。明治六年の二月にここに戸籍が開設されたのが私のところの最初で、そのおコトさんが明治七年に浜名主の長谷川という家から婿養子を貰つて所帯を持ったのが明治七年です。浜名主というのは浜一帯の管理職だよ、武士じゃなくて町人。それで明治八年にこの商売を始めたわけよ。

本家のほうの又市の女房が今の東海大学のすぐ近くなんですけれども、平塚市北金目というところの柳川という家からおトミさんが嫁に来た。その又市とおト

ミさんの夫婦に子供がなかったんで、おトミさんの甥っこの(長男は、柳川常治というのが金目の家を継いで、その弟の)守之が又市・おトミさんの養子に子供の時から入つた。

その守之の妹である喜代の三人きょうだいなんだけど、(母親が早く死んだので後妻が入ることになって)兄貴の守之が家にいるからおまえも家においでつていうんで、又市の家で私のお祖母さんの喜代も育ちました、

私の家の最初の先祖のおコトさんと長太郎の夫婦にも子供がなかったもんで、兄貴が本家を継いで妹の喜代がまた私のところへ二代目としてここに養女に入つたわけですよ(ところが昔のことだからね、戸籍は金目のまま育ち小田原の学校にかよい卒業してます)。

お喜代さんの連れ合いは大磯の国府祭(こうのまち)六所神社の神主を代々してた近藤家から四男坊の喜久衛(きくえ)が養子に家に入つたんだよ。その夫婦には男の子がなくて、私の母親になる寿子と叔母のみつ子の姉妹二人だつたんだよ。

そのためにまた金目の次男坊、卓(たかし)が養子に来て、それで四代目にして初めて男の子、私と弟が生まれた。

終戦前の頃

親父は商人じゃなくて学者だったんですよ。今の東京農工大学、昔でいうと、東京帝国大学農学部実科っていうんだ。そこを卒業して、一番最初に国の施設である埼玉の鴻巣の試験地に赴任をしました。その次に兵庫県姫路の小麦の試験地に赴任したので、私が生まれたのは姫路です。

弟が二年後に生まれてさらに年子で妹が生まれて、それでお袋などは子育てが大変だったので、私はこの小田原に来てお祖父さん、お祖母さんに育てられた。

実に不思議なんだけどね、学校にあがるまでの記憶ってのは何にもないんだよ。やっぱり両親から離されて育ったということがあつたんじゃないかなと思うんだけど、全く小学校にあがる前の記憶がないんです。

私が小学校にあがるとき、親父は姫路の試験地から大船の農事試験場、今のフラワーセンターがある所に移ってきました。そこで親父は米と麦の品種改良とか米の育成、麦の育成だとか、指導する立場の主任研究技師だったんですよ。

そういうことで私は小さい時からお祖父さん、お祖母さんに育てられているから、お祖父さんから「この家の呉服屋を継ぐのはお前だよ」と言われて育ったんです。

で、ご承知のとおりこの通りは終戦時、八月一五日の未明に空襲を受けて東半分が焼け野原になって、この通りも古清水旅館が半焼けで止まった。その時お祖父さんはちょうど六十歳だったんだけれども、じゃ、しょうがねえから商売やめてしまおうと、店閉めていたんですよ。

そしたら、その当時の小田原市長の佐藤謙吉さんが家においてなつてね、「あんた、店閉めちゃうという気持ちだけんど、この通りも焼けている。あんたここがやめたらこの通りが成り立たない。もう一度どうか考えなおして店あけてくれないか」と要望があつて、お祖父さんまた店を開けた。その当時、番頭が三人ともみんな兵隊に行つていてまだ復員してなかつたんで、お祖父さんは女店員を雇つて店を再開したんだ。

「俺、学校やめんべか」

そのときにお祖父さんが私(終戦時に小学四年生)に、「お前はこれから仕事をボチボチ覚えなきゃいけない」と、言つたんだ。

それで、まず朝飯を食う前に掃除。「上の二階から掃き掃除、拭き掃除、外の水まきを、お前がやつて、店員が来た時は気持ちよく仕事をしてください、と迎える体制を整えるのがお前の仕事だ」寝坊して、隅から隅まできちん

と掃除しないで真ん中だけはオツパイッテから飯に取りつくとね、お祖父さんぐるっと廻つて点検をして、「この野郎、もう一回やりなおしだ」と、こういうわけだよ。そうすると飯を食つてる時間がないから、飯を食わないで学校に行くというような仕込まれ方がスタートだったんですよ。

そういうことをして、あれは確か小学六年になったころだと思ふんだけど、呉服屋になるにについては絵が描けなきゃいけないということ、宮部春紅っていう方が二中(白鷗中学)の絵の先生をしていたところを、「お前、今週の土曜日から宮部さんのところに行つて絵を習つてこい」と言われた。

日本画だと狩野派と土佐派があるでしょ。宮部さんはどっちかという土佐派の描き方だった。土佐派の描き方というのは、絵の輪郭を薄墨で描く。呉服屋の手書きの友禅というのは輪郭を糊で描くんですよ。

自分で絵が描けると、線が生きているか死んでいるか、ちゃんと写生から入った絵かどうか分かる。私もお客さんから何か注文された時にさつと絵が描けなくちゃいけないというふうなことで、小田高卒業する迄の約六、七年間、その宮部先生のところに通つて絵を学びました。

ところが子供だからね、行く度に絵を描きたいという気持ちがあるとは限らないでしょ。そうすると宮部先生の奥さんが私の顔を見て、「彰夫ちゃん、今日はあまり気が乗つていないね」「うん」「でも今すぐ帰ると怒られるんだらう」と奥さんが布団を敷いてくれて昼寝して、それで丁度いい時間に起きて、サヨナラと言つて帰ってくる。そういうふうなことをしながら絵を習いましたよ。

はじめのうちはお祖父さん、商品など触(さわ)らしてくれませんでしたね。私は大学一年の時に簿記を習つたんです。お祖父さんのやり方は昔の大福帳のようなやり方だった。その当時終戦後になつて税務調査が厳しくなつてきていた。それで、私が大学二年の時からお祖父さんの帳面を見て伝票を起こして複式簿記で整理をしていたんですよ。

ところが、終戦後は飯を食うとか家を建てるという方が先決でしょう。呉服の買い物なんか二の次、三の次なんだ。私が帳面をつけるようになって毎年、毎月赤字ですよ。それで、「これじゃしょうがない、俺、学校やめんべか」と言つたら、お祖父さんは「何、これからはちゃんとした教育が必要だから俺がもうやりきれなくなるまで、お前学校行け」と言

って、まあ、とうとう卒業しました。「伊達に年を取っていちやいけねえよ」

卒業試験が終わると、次の日に問屋の長谷川次郎兵衛商店(任入れ先)さんの世話で東京の小岩の長崎呉服店へ見習い奉公に行った。長崎といってもチェーン店の長崎屋とは違うよ、長崎という呉服屋。それも日本橋の長谷川の仲介でその家に行ったんだよ。

これは大きな店でね、寝泊まりしている店員が三十三人もいた。その半分の人数が先に店を開けて、残りの半分が飯を食うんです。後番、先番、一週間交替でやっていった。そうすると後番で飯を食うときにはね、もう、味噌汁に実(み)がなかったね。

それで私が最初に行った昼飯のおかずが煮干し三匹だった。えっ、と驚いた。家の隣りは乾物屋だった。煮干しなんていうのはダシでしょ。りんご箱の中は藁と一緒に煮干しがいっぱいあったんだよ。俺、こりゃひでえ家に来ちゃった、と思っただ。

暫くたつてのことだが、飯は銀シャリで体裁がいいようだけれども外米だった。朝炊いた飯が残ると昼飯に食う。そういうふうに残った物、残った物、順繰りに食べるわけですよ。そうすると夏になると外米なんてやつは臭くて

もう食べられない。それで癪にさわってね。私がテーブルに全部こっぴどくやっつてその外米を掴み出して並べたんだ。すぐに女中が、「山田さんがこっぴどくやっつてテーブルに飯粒を並べちゃった」ってこういうわけだ。長崎屋の親父さんが、「お前ちょっとここに来い。何でこういうことするんだ」って言うから、「旦那ね、私なんか体裁じやなくて、実(じつ)の飯を食った方がいいから外米を麦飯にしてください」と頼んだんだよ。そうしたらね、長崎屋の親父さんも意地っ張りなもんで、印旛沼のほうに行つて俄で米買って来た。それで本当の銀シャリになったんだよ。

番頭がね、「山田、お前のお陰だよ、ちゃんとした銀シャリを食えるようになった」と。で、「番頭さん、伊達に年を取っていちやいけねえよ・・・」。

そんなことがあって、見習い奉公してきた。昭和の三十三年だね。

修業は一年と半

私は最初三年の計画で長崎呉服店に行ったんだよ。ところがお祖父さんがもうやりきれなくなっちゃったんだね。

私が小田高(六回生)に入った時、私の親父は四十二歳でしたけど、親父が試験場をやめてお祖父さんと私の中継ぎをしてくれた

わけだ。不充分ながらも私と祖父との間をつないでくれたことは本当に感謝しています。

私の親父はね、さっき言ったように品種改良だとか、そういうことをやってみましたから、新品種の麦や米を植物図鑑に描いてある絵、ご存じですか。ああいうふうには、正確にね、花から実から茎から根っこまで正確に描くんだよ。そういうことで絵は描けていた。だから染めあげている柄物が、本当にちゃんと描かれているかどうかってことは分かった。これはいい絵が描いてある、色もいいうことでお客さんと商売してたんだね。

ところが経理が出来るわけじやないし、仕入れも出来るわけじやない。所謂経営は出来なかつたんですよ。そういう関係で一年と六ヶ月ぐらいの時に、もうやりきれないから帰って来てくれとお祖父さんが迎えに来たわけだ。

それで私は帰ることになったんですけれど、その時に長崎屋の親父さんが「君も俺の所は短い間だったけれども、自分のところは多少やり方の違いがあるのは覚えてたろう」「はい、お陰さんで覚えさせてもらいました」「今度君がここの家にこうしたらいいのではないかというものは何かあるか」と。あの親父さんも偉かったと思うよ、そういうことを

訊いてきたんですよ。

当時商社の連中が八千円、保険会社がよくて一万円ぐらいだった。店では三食付きだったけれども、大学出が月に二千円。高校出が千円。それで、「旦那、私なんか見習いに来ている者は二千円でも千円でもいい。でも、この家で本当に仕事をすると人間には、もつとちゃんと世間並みの給料出してやらなければ、これからのいい人材は集まらないですよ」という話をして帰ってきた。一と月ばかり経ってあらためて私は小田原の魚を持つてお礼に行った。そしたら店員の連中が、「山田さん、あんた帰る時に俺たちの給料あげてやれ、って言ったんだってな。三倍になった」って言うんだ。「そうかよ。それじや、今日はお前たち十人ばかりで牛肉二貫目ばかり買ってこい。店を閉めてからすき焼きを食べようや」と、すき焼き食って帰って来ました。

「中庸は徳の至り」

まあ、そんなことがあって私はここの家へ入ったんだ。

入るとお祖父さんにまず、「仕事を上での基本の精神としては、呉服屋なら呉服屋の義務・責任がある。義務・責任を忘れた商売をするくらいなら今日で店を閉めちゃえ」と。とにかく、商

売においては義務・責任を忘れちゃいけないと言われた。

それから、「中庸は徳の至り」と言うんだ。「贅沢もしちゃいけないし、貧乏もしたくねえ。まづいもんも食いたくないし、うめえもんばっかり食つてれば病気になるってしまう。ほどの生活が一番いいんだ。中庸ということを守れ」と。

又、こういうことも言われた。「一万円で仕入れするのが当たり前だという商品を、問屋が売り出しをやって例えば六千円でその品物を仕入れる。(普通ならば一万円で買ってきたものなら、一万二千円とか三千円とか付けて売るわけだよ。それじゃいけないって言うんだよ。)安く買ったら、その安く買った分を家が半分、お客様半分に分ける」と。こういう頑な爺さんだったんですよ。それをすっかり身に付けさせられたから、私はいまだにそれを守ってます。

目方は指で量る

今は反物にこの絹物は何グラムの目方がかかっているかということが表示してありますよ。ところがその当時はその表示がなかったんですよ。それで仕入れに行く時は、絹相場はどういうふうにして覚えるかという、毎日神戸と横浜の絹生糸相場が立ってましたから、商品相場がそれを参

考にしてこれは何グラムついているからいくらでいいなっていうふうに分けて換算しないといけない。それが出来ないで問屋の言いなりだとまともな仕入れが出来ないわけだ。

そういうことでね、夕方五時ごろになってお客さん来なくなるよ、反物を、こうやって掌というより指に乗せて、これが何グラム、何匁と、台秤に乗つけてみて、実際の秤の数字と自分の感じた数値とどれくらいか、誤差があるかとやるわけ。それでだんだんそれをやっていって、私の違いが二匁か三匁になりましたよ。

そうやって反物の目方が分かるよと同時に、これを毎日やっていたせいで、反物を手に乗つけただけで、この糸質がいいか悪いか、それから織物としてきちつと織られているかどうか、この指先が覚えた。私の指先ってというのは、そういう意味では今でも大事なんですよ。

反物を指先で量ることは、はじめはお祖父さんに言われた。「お前、この反物はどのくらいの目方がついてるかということから分からないと問屋に仕入れに行つた場合に問屋の言いなり、気なりに値段でおつつけられちゃうぞ」。「向こうの連中が言つたら、いやそうじゃない。今日の相場はこうじゃねえか、この反物は何匁付き

じゃないか、この値段でいいはずじゃないかと、ちゃんと根拠を持って言えなきゃ駄目だ」ってこういうわけだ。それでこれを覚えたんですよ。

今の小田原の呉服屋、私が知っているだけで十八軒ぐらいい閉店倒産してなくなつてますよ。残っている人たちはそのような修業をさせてませんから、このようなことは分らないと思う。

服部家の墓守もしてます

服部家というのはこういうことですよ。さつき私のお祖父さん(喜久衛)が国府の近藤家から養子に來たつて言いましたね。その祖父さんの親が小田原藩の家老の服部家の三男坊で広治(ひろはる)って人なんです。

廢藩置縣の後、そういう連中が全部首になって、その服部家というのはお祖父さんの従兄弟の代で潰れました。最後はどうも八王子のほうで亡くなつたらしいんだよ。中村(静夫)さんが来て話してくれました。

それで私のお祖父さんが、「俺の親は小田原の服部から養子に來たから、服部の墓というのはい小田原のどつかのお寺にあるはずだ」ということでね、さんざ探しましてね。

金次郎の郵便通帳
上部に「二宮尊徳 若きとき勤儉貯蓄の道を講じて領主の家老服部某が家計の窮困を救う」 下部に「貯蓄は家を興すの本」の字が見える。(山田さん所有)



そしたら、戦後になって分かつたんですけれども、板橋のお地藏さんの隣りに常光寺(浄土宗)というお寺があります。それから誓願町の誓願寺(浄土宗)、あと蓮正寺に一基あつたんですよ。服部家が潰れちゃつてますからね、そういう先祖の墓を見付けてから、そのお墓のお守りをお祖父さんが自分でやるということになつたわけだ。だけど自分の家を入れるとお寺が四軒になつちゃうんですよ。それで、たまらないから、蓮正寺の一基は常光寺に合葬しちまおうってんで常光寺に合葬して、それで今でも、私が常光寺と誓願寺のお墓にお彼岸だ、お盆だつて時にはちゃんと掃除をしてお参りしてるんだ。

金次郎像の郵便通帳

これがね、今の郵便貯金のはじめの通帳ですよ。明治の頃、郵便貯金の表紙になっている。お祖父さんが買ったもの。今は金額が書いてあるけど、昔はこうやって印紙を貼ったんだよ。

こちらに坐っているのが金次郎さんだ。珍しいだろ。以前欲しいという人があったんだけど、家宝ですからとお断りしたよ。

この金次郎さんは若いうちに服部家に奉公してらんですよ。奉公して、服部の息子達が塾に行く時にお供して一緒にいていつて、自分は部屋に上がれなかったんだ。だけど窓際でその講義を聞いて金次郎さんは勉強した。

金次郎さんは大人になって自分の家屋敷や田畑を復興した。服部家は家財が大分かつたるくな

っていて、金次郎さんと呼んで、どうか服部家の家財を立て直してくれないかと頼んだわけだ。そうしたら、金次郎さんは「殿様、三年間、私の言うとおりに生活しますか」ということで、金次郎さんの指導のもとに家財を立て直しを図って三百両残した。

それで、「この三百両は、殿様も私の言うことを聞いたけども、殿様だけの努力でこうなったんじゃない。殿様の家族や家来たちもみんな守ってくれたから出来たんで、この三百両のうち百両は家来たちにお分け下さい。百両は

絶対を手をつけちゃいけません。あとの百両は臨時の支出に對しての備えとしておきなさい」と。

まあ、今でいう普通預金だね。定期預金でなくて普通預金として、今でいうと三分立というような指導をしたんだ。それで、それがこういう表紙になってるわけですよ。

そういうようなことがあって、服部の御家老が自分の家財を立て派に立て直してくれたもんだから、小田原の領主大久保忠真公が分家の立て直しを金次郎さんに依頼をして、それでなかなかそつちの連中が言うことを聞いてくれないから、ほら、成田山にお籠りかなんかをしてその結果

ようやく復興が出来たでしょ。そのあと、金次郎さんは日光の御神領の立て直しを命じられて、それで向こうで亡くなってるんですよ。

この服部家の殿様の服部十郎兵衛忠捨(ただつね)という人と奥さんの立派なお墓が板橋の常光寺にあります。

私のお祖父さんの話で、「俺の親父はよ、そうやって武家の家老から来たもんで、畑に行くときも刀差して行っちゃった」っていうことを聞いてますよ。

(つづく)

(平成二十六年十月二十五日)

聞き書き 青木良一

小田原大秘録(巻一から巻三までの読み下し文)

第八回 巻三の一

鳥居 泰一郎

大稻荷大明神御再興の事

宝永六年、綱吉が死去し家宣へ代替わりした。正徳二年九月、大稻荷神社の祭礼時、大久保忠方が同神社へ、縁起を尋ねる

時に宝永六丑(一七〇九)正月廿三日。公方様(綱吉)御他界に付御法事惣奉行并御霊(みたま)御奉行共に殿様(忠増)へ仰付けられ、右につき箱根御関所へ増番為し、御

家老杉浦一学登山昨日より小田原表御番人大久保儀大夫、加藤百弥、昼夜一度宛て廻る。

同月廿六日。大殿様(忠朝)御落髮遊ばし為され、杳入様と称え奉り候。四月六日。上様より問部越前守(詮房)様を以て杳入様付に為され、御機嫌伺い、御頭巾、御足袋、御□ひ成られ候て、前々の通

御登城遊ばされ候様御意蒙り為され候。

同月廿日。將軍宣下御代替り、御目見大殿様御長袴、十徳(じゅうとく)を召し為され候。此の節大久保又右衛門帰藩のところ、小峰の明屋敷跡にて、弓、鉄砲、矢場取立て可旨仰せ出され候。時に正徳二辰(一七二二)六月十一日也。

同九月十四日、明十五日、大稻荷祭禮に付先騎には御番頭辻七郎左衛門、跡騎御番頭岩瀬長左衛門、人数廿八人にて相勤べき旨今日仰せ出され、□□□等の扣えに

御番頭孕石勘兵衛、近藤庄右衛門へ仰せ致し、御長柄甘本、御弓十張出され候に付、頭共も騎馬にて騎(のり)為され候旨、今朝、早飛脚にて申し来る。

御鑓奉行吉岡儀大夫并御先手頭山田弥一左衛門仰付けらるるところ、弥一左衛門儀障之有候故、横井甚五右衛門被□申し付、自下十一人も出勤す。御名代杉浦平大夫相勤め、甚々見事に御祭禮之有、小田原府内残らず御輿をもつて社巡り、九月十五日夜、漸々御宮へ被為入□せ、夫々へ引き取

りける。昨十四日、若殿様(忠方)江戸表御発足にて鎌倉へ御廻り候次第にて、九月十六日、宮下へ御着き之有候に付、杉山小右衛門御機嫌伺い申し上げ候ところ、大稻荷大明神縁起御尋ねに付御上候書付の文

正一位、田中大稻荷大明神「社記」

相州足柄下郡小田原城下谷津、正一位田中大稻荷大明神は洛の稲荷の宗社より出、同一体の神也。曾(かつて)、神訊(きき)め曰く、我は是伊勢豊受大神の同体にて現れる所則ち弁財天也。馬頭観世音を以て本地と為し、矣(ここに)、我を崇信する者、須(す)べからく此三神を併せ念ずる也。

神書抄に言く、倉稲魂(ウガノミタ)は、宇賀の神也。伊勢豊受宮と同一体の神也。私謂える弁財天は、宇賀の神也、故写所の神符は、三面六臂の観世音の像にて、中面は田中大稻荷の神、左面は豊受大神、右面は弁財天也。此二依て神託を以て三神を配し、神影を亦、奇過ならず哉。

洛陽の稲荷縁起に言く、稲荷の神は、天武天皇白鳳元年壬申十二月十三日、淡海の国、栗太(くりた)郡磐城村の主、殷(いん)の新婦、床席の端頭、一夜の間に稲生めて、且(あした)に逮(およ)んで顛垂(えいたれ)て熟せり、明る夜、更に一穗生まれ、新婦庭に出て、鑰匙(やくし)天より前に落るを、

婦取りて殷に與うに之を得て始て、家、国富み、以つて、其稲生の地にて、天柱、国柱、倉稲魂の神を合せ祭りて以て稲荷大明神と称す。

稲荷とは中古以来俗説の字義也。

殷、祝を為し焉(これに)供仕す、同二年始て鑰田(やくた)氏を賜り、蓋(けだし)、殷の家に稲生の婦、鑰匙を得るの祥を美し、元明天皇の和銅年中、殷夢(はかむ)く稲荷の神告て曰く、

当(まさ)に山城国紀伊郡藤尾山に遷し祭る。殷、夢語に随ひ藤尾山に登り、倂(と)ころを相(みる)、杲(あきら)かにして、三峰険峻の處(ところ)に光輝有り、殷、益(ますます)喜て、草莽(そうもう)を芟掃(かる)く、崔嵬(さいがい)を造平(たいら)にして、宮柱於(を)下津宿根に建、是於(を)同四年辛亥二月七日、戊午鎮座し奉所、三祖也。嵯峨天皇弘仁七年丙申秋空海、稲荷の神社を藤尾山に移し奉る為、藤森天皇の敷地内を望請し、勅許を得て、且、神託を蒙り三峰より今の藤尾山に移し鎮座奉焉(おわんぬ)、龜山院弘長三年(一二六三)癸亥、信託有て、文永三年丙寅正月十六日、田中の神、四大神兩社を併せ祭る、故に今の所に鎮座五社也。

其第一社を下社と曰て、倉稲魂命を崇む、其二社は中社と曰て、級長戸辺(シナト)命を崇む女神也。其第三社は上社と曰て、級長津彦(シナツヒコ)命を崇む男神也。神代の巻に言、伊弉諾(イザナギ)尊

と伊弉冉(イザナミ)尊と共に大八州国を生む。然して後に伊弉諾の曰く、我生し所の国は唯、朝霧有りて、薰満の哉(ま)吹探の氣化して神号とし級長戸辺命と曰う。亦、級長津彦命と曰う、是風の神也。又、飢時、生児を倉魂稲命と号す。是は五穀を播(く)の神也。

其第四社を田中の社と曰う。猿田彦大神を崇む。天照大神の皇孫瓊々杵(ニギハヤヒ)尊、葦原の瑞穂国に降り令め、是時、一神有り(衝)に居る皇孫勅して、天鈿女(アメノウズメ)に之を往問せしむ。衝の神対(たえ)て曰く、天照大神の子、今当(まさ)に降行と聞く。故に之を迎奉相待り、吾名は是、猿田彦大神也。

其第五社は、四太神と曰う。大己貴幸魂(オオナムチノサキタマ)を崇む。総而五社也。神代巻に言う。素盞鳴尊、稲田姫を娶り、大己貴神を生む言々。且、荷田龍頭太を以て末社に列し、社頭の守護神と為。鑰(かぎ)田、荷田倭訓相通す。荷田の末流連綿して正目代と称す。稲荷の神職也。中古以来、鑰字を改め、荷字と為す也。

今也(また)崇む所、小田原正一位田中大稻荷大明神は、洛の稲荷第四社の神を胤(つぎ)て、且、小田原鎮座の地、亦、田中を以て焉(これ)を伝称す。固(もとより)、自然の因然有者か。異地同称、顯然として以て証明す可し、然も猶、城下に此社有て、

王畿に宗社有ごとく也。秀異なら不。宝永二年(一七〇五)乙酉初夏、下旬、我太守、四品小田原城主、藤原朝臣大久保忠増君、官暇を賜り在城の日、卒伍の者有り、其女(清水池右衛門の女也)、数日蒼疾を患い病に間(あるとき)、谷津村福泉寺に到り、現住雷山に謁見し、理趣分を誦して病苦を免ん(こと)を請う也。雷山乃(いま)し焉(これ)を加持す。彼女忽ち言て曰く、我は是小田原竹之花町

十徳 男子の上着の一つ。丈は短く羽織りに似る。武家のは素襖に似て胸紐がある。江戸時代には医師・儒者・茶人などの礼服となった。



絵：田中 豊

宗社 宗廟と社稷(社は土地の神、稷は五穀の神)。ここでは大本の社。矣 語の終わりにつくと助詞になる。ほさき。鑰匙 鍵を入れる袋。崔嵬 石をいたたく土山。藤森天皇 京都市伏見区深草にある藤森(ふじのもり)神社のことか。藤森天王社とも称す。創起は不明、山城国紀伊郡藤尾の靈地に祭神を鎮祭。目代 目付役人。王畿 王城から四方へ各四里。方千里、王城付近の地。卒伍 身分の低いもの。理趣分 真言宗の読誦經典。大般若經理趣分に相当する。

田中稻荷の神也。我の父神、嘗(かこ)て関東に来住すと雖も、然るに百年以前(今、考るに當に慶長年中)故有て洛の宗社に還り遷り玉う。爾来、我此に留り住す、然るに蛮世、神を尊崇の領主無くして示現する所無き也。故に社地、自ら廢壊し森討(しんじゆ)鬱葱(うっそう)として、経路を塞ぎ、祠壇頽敗し、掃除を失う。今也(また)我太守(忠増)仁惠正道を上に乗て、忠を盡し、下を撫て恩を施し、且、諸神を崇信して、誠に哀斯(これ)に至り、今の如き明主を俟(まち)ち、好時節に過(あ)う。故に小女に託して言為(いわせしむ)。然るに又昵近(じこん)の士内芝丹治と言者有、其生質よく太守の厳意を契り宜く、丹治をして田中祠に代参せしむべし。是に雷山城に登り以て太守の聴に達す。五月六日、命有て丹治をして田中祠に代参せしめて後、彼の小女を福泉寺に招き直に託宣を請く。雷山乃(いま)し理趣分を執行して、稻荷の神を申降奉り、神託して小女に曰く、今日の代参欣歎して焉(これ)を歎(う)く、願わくは太守、田中の社地を再興し以て祠壇を營し、華表を建て、扁額を懸けるを請う。祠則ち須(す)べからく坤隅(こんぐう)に向かうべし、其意、太守を守護せんと欲する也。額字亦丹治をして之を書かしむ。且、願わくは號を賜わるに大稻荷と稱ふ哉。丹治以て託意を達す。太守これを聴に達す。

太守神託に應(こたえて)、命令を下

し、社地及祠壇、華表を再興し、新たに扁額を懸く。日不(ならず)落成矣越(こ)において同月十二日、遷座即ち田中大稻荷大明神を勧請し奉り卒(おわんぬ)。雷山を以て別当と為す也。神復た託して曰く、至願に足る矣。

太守の恩に報るに国家安穩、武運長久、子孫繁榮、以て守護す可し。丹治に謝するに宝珠を以て之を授與す可し。此れ會(あ)つて洛の稻荷自り伝来する所の神宝也。宜く之を尊崇すべし、謹て諸(これ)を忽勿(ゆるがせにするな)かれ。女に屬(ゆだね)て、之を拝受し、又、雷山に與(あたゆる)に神前に奉納する所の金銀米錢、束帛(そくはく)等を以てすべし。宜、社事に急(おこた)ること勿れ言々。此間、女の病亦平愈す。又、神託して曰く、福泉寺境内の後嶺の半腹、是乃(けだ)し勝区也(ママ)。願くは社を此地に遷すを請ふ。然して則ち、舊祠を以て弟神官位稻荷に譲と、是に依り太守神慮に應(こたえて)命令を下し、後嶺の地を監して、因(よ)て同三年丙戌正月廿三日、社壇(しやい)定め后土(こうど)を祀て新たに社壇を營建し、本社を圍遶(かこみ)て、末社の祠を列(ら)ねる。拜殿亦成る。五月七日、神を今の地に遷座し奉る也。同六月廿八日、官位稻荷を以て田中の舊祠に遷座す。同六年己丑九月十五日、祭礼の事を期(はじめ)、神輿を城下に振ふ。是時、太守、命を下し、先驅後殿の騎馬及扈從の徒、弓

鍵の具を卒、行列を整て焉(これ)を警衛す。是より毎歳例として、祭礼を修す。正徳元年辛卯五月廿六日、太守、社領七拾石を以て、田中大稻荷并官位稻荷の両社に奇附す、奇附状別に之有り。同年、太守、神祇道の管領卜部兼敬卿に倚(よ)頼して以て神位を請ふ。是に於て六月十二日、正一位及仙洞(御諱識仁)奎翰(けいかん)の額を授け奉らると共に帷(とばり)を大稻荷大明神、靈蹤(れいしよう)を田中に垂玉(たれたま)ふに、以降、威嚴其夥(かこ)く矣(こ)に誠に測易(やす)からざる也。宝永二年秋八月、神、覲(かんなぎ)某に託して竹内伊勢守曰く、今茲(こ)に、九月二十一日。太守を万人の上首に為令(な)さしめる也。果して、同年九月廿一日、執政の職を奉じ、侍從の官に任ず。且、小田原城楼既に成就す。太守、三浦伴六をして名代と為さしめ、上棟の規式を監す。是時、洛の稻荷、神使(兵虎稻荷)を遣し守護す。太守此れ又、神託有りて曰く、其奇瑞を識るはしかのみならず、太守、在城の間、其居第を保護し、太守参府有ときは、則ち途中の輿駕を守護す。或は、太守登堂して御前に近侍し、印章を闔(か)く(こ)の諸侯太夫に頒ち賜ふ。則ち、守護の奇瑞有る也。是の外神の靈應、枚挙す可ざる也。凡(およ)そ、求有る者、信有る者、神澤に憑(た)まざる無き也。託宣毎に、瑞惠效驗を示せば、人僉(みな)曰く、道也事匪(あらざる)也。靈庇之洪蔭

なる所、和光之廣覃(こうたんの)なる所、之ならざる所無き也。在(あ)らざる所無き也。是を以て信ずれば、則ち必ず感格し、祭れば、必ずや來享す、宜きかな、人の焉(これ)を崇奉り誰か敬恭せざらんや。

正徳二年壬辰季秋
別当華嶽山福泉寺雷山敬白
小田原正一位大稻荷大明神の靈驗洋乎(みちあふれる)、盛乎、赫々(かつか)然として明らか哉。今也(また)、洛の稻荷縁起に據て、其本を正し、神書を考へて、基故を釋(たず)ね、粗(あら)ら之状を列書す。当家の奇瑞に於ては、則ち余の聞見する所也。其大低棟(こうがい)十の二三を以て記可歟。因て筆を涉(と)て其後に書く。

雪江敬人 樋口栄清誌

若前様(忠方)、是を御覽あつて、御感喜遊為され、程無く江戸表へ御帰りある。

華表 中国で官城、陵墓などの前、或いは大路が交わる所に建てられる標柱。ここでは神社の鳥居。

坤隅 西南のすみ。未申の方向。

束帛 束ねた絹。

后土 地の神。

奎翰 書き物。

覲 男の巫女。

奇瑞 吉兆。

闔国 国を挙げて。残らず。

靈應 神仏があらわす不思議なるし。

廣覃 ひろくおよぶ。

來享 諸侯が来朝してものを献ずること。

棟檠 大略。あらずし。

(以上、田中大稻荷大明神「社記」の漢文は卷一の巻頭言の漢文と共に、報徳博物館の飯森富夫学芸員の監修をいただき読み下した。)

正徳三年に忠増が死去、小川町に上屋敷が移る。正徳六年に將軍家継が亡くなる。

九月廿六日、妙臺院(忠増の母)様去る七八日頃より御腹合勝為されず痢の氣にて、御小用御滞り御不快に成られ御座候ところ、九月廿五日の夜五つ時過、御卒去遊され候。同二十七日、御悔為、桐の間御番頭大沢駿河守様上使為御越遊為され候。同二十九日、間部越前守様後縁氣御尋為され、引折(ひおり)御拝受にて同夜御忌御免遊ばされ、之旨仰蒙為され候。

同年十二月、御扶持人之職人共残らず御先手格に仰付けられ、刀を指し候様仰付けられ候。

翌正徳三年(一七二三)六月十四日、若御前(忠方室)様、御平産、御墓目役山本十右衛門、御□の役孕石勘兵衛へ仰付けられ候。七月廿六日、殿様(忠増)去る廿日頃より御不出来に御座成られ、御引込み遊ばされ候。然るところ昨二十五日夜亥の刻御卒去され候。尤も、御役御免之儀御親類様以て廿五日朝、御□差出され候ところ、昨朝、御小納戸衆上使為し、御引折御拝領之有、其の後、若殿様御登城之ところ御願ひ之通、御役御免心徒

にて致し養生仰出さる。同廿七日、御届之有候ところ土井山城守様を以て上使為し、御香奠銀百枚御拝受、御法事総奉行、御家老渡辺七郎右衛門、御用人山中久内、廿八日御葬式落髮、内芝丹治、辻満儀大夫、同村弥五兵衛。

八月三日、御老中様より御内意之有候は、御上屋敷は其の儘下置さる可候に付、中屋敷は差上げらる可旨、同月五日、寿昌院様、芝へ御移居遊ばされ御中屋敷より御前様御徒移り遊ばされ候。

九月六日、御家督御礼仰上げられ候節、杉浦平大夫、大久保又右衛門、山本十右衛門、家継公へ御目見仕り候。

同年十二月廿九日、今よりは御旗組之者、御持弓、御持筒之者、御先手組は足軽。

右之通に相唱え、町組之者ばかり町同心と唱え、於諸番所頭共へ下座の儀御旗組之者は御旗奉行ばかり、御持組之者は御持組頭ばかりへ、足軽共は御先手頭ばかりへ、右の通下座致す可。南町口御番所は足軽、町同心打ちまじり相勤め候間、双方の頭へ下座致す可并御馳走に付物頭代々罷り出候。御役人へ同断に仰せ付けられ候。

八月十三日、今より御徒より始まる諸組の組頭の事、小頭と唱申す可候。九月十二日、御旗組、御持、御先手、町同心等六十歳以下者、病氣に付番代り相願ひ候か、

只今までの通申す可に付、六十歳以上の者病氣に成り願ひ候はば、相応の俸又は養子仕り候共、組み入中付番代之無申し付可と定之有候。

御先手組の者、御軍役、股引おなんどにて之有候ところ、度々損し違し候に付、地廻り着用の股引、是より白股引を着用致すべく趣仰出され候はは、此節より相定候事并蛇の目傘無用に為べく仰られ付けられ候。

九月廿日、小川町御屋敷へ下置き候に付、請取為故、御家老山本十右衛門、御用人酒井伴六以下出役致し候。

十月十六日、小川町松平伯耆守様御屋敷と御替下され候。是も三千五百坪と別に之有候を当分御領之趣、同月廿九日、本庄にて五千坪差上げられ、三千五百坪と振替之儀御願ひ差出され候得共、場所之御屋敷に付、外之例に相障り候趣にて、御願書差戻され候。

十二月十九日、御男子様御出生遊ばされ候。時に正徳六(一七二六)甲二月十三日、昨朝卯午の刻、御上屋敷北長屋平野代右衛門宅より出火致し、二階焼亡、之に依って御遠慮遊ばされ、廿一日御免之趣、同廿五日、二の丸にて此頃馬場出来候に付、御持組、御先手組共に罷出で普請仕り候。閏二月十一日、殿様御入部に付、御目通り并御通り道筋盛砂仕り、水手桶差し出す

可、夜に入り候て、丸提灯差出可ところ、同月廿七日、□末の中刻、御着城遊ばされ、御礼使者大年寄杉浦平大夫出府致し候ところ、四月晦日(正徳六年)、家継公御他界遊ばされ候趣、同五月六日、殿様御参府遊為され可、御発駕、神奈川宿御泊り遊ばされ、御伺候ところ、御関所など御固め之有可旨、井上河内守様御指図に付、此の所より御帰り遊ばし為され、亥の下刻、御着城、然る處、同月十四日、河内守様より御手紙を以て鷹山之城主稲垣和泉守様□御参勤に付、御参府然る可段御指図に付、殿様卯の刻、御参府の為御発駕之有候。(つづく)

新会員紹介
名前(敬称略) 住所
河野 節子 小田原市成田

会員の方へお願い
—新規会員募集—
小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方に是非会員になつていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。
小田原市堀之内三二一五
電話 ○四六五三三七七八
植田士郎

久所の始まり

宮原 諄 二

久所というところ

私の住む小田原市の久所(ぐぞ)は三つの小さな谷間からなる里山です(図1)。箱根明神岳の山裾の諏訪ノ原丘陵の北麓にあります。それぞれの谷間にある集落がそれぞれの組を作っていますので、久所自治会区内を西から南、そして東の組へと歩いて回るとおよそ一時間近くもかかります。しかし世帯数は七十八と小田原市自治会の中でも最少に近いでしょう。

久所には自然がまだまだ残っています。玄関前で手をたたくと山からはこだまが戻ってきますし、早朝や夜半になって遠くの踏切の音がかすかに聞こえてくることはあっても、ふだんは風の音や鳥の声、そして田植え時はカエルの声ばかりです。キツツキの音やカッコウの音が聞こえてくる時もあります。引越した直後には、庭で飼っていた七羽のチャボがイタチに毎晩一羽ずつ殺されました。タヌキ、イノシシ、ハクビシンなどはよく現れますし、崖の麓から湧く「久所の泉」では季節になるとホタルが現れます。サルは時期になると我が家の庭を

親子連れの集団で通過していく常連ですし、家の中にも窓を開けて二回ほど入ってきました。このようなことを言いますと、よほどの深山幽谷の地と思われるかもしれませんが、新幹線に乗れば自宅から一時間ちよつとで東京駅に着きますから「それほど秘境ではない辺境」と思っています。

久所は周囲とは違うらしい

久所は箱根山を背にして、小田原市の府川および北ノ窪自治会、そして南足柄市沼田自治会の三つの区域に囲まれています。国土地理院地図には久所と表記されていますが、行政地名は「小田原市府川」です。府川とは諏訪ノ原丘陵にある諏訪神社を共通の鎮守としていますから、昔から親戚のような間柄であったのでしょう。

諏訪ノ原丘陵は一万五千年前の縄文時代早期からの遺跡が残っていて、小田原地方では最も古くから大規模に人が住んでいた場所です。府川には縄文末期から弥生文化中期の諏訪の前遺跡があり、また北ノ窪には弥生文化後期の北窪小原遺跡があります

(「小田原市史」)。また沼田には縄文文化中期から後期にかけての沼田上ノ原遺跡や沼田城山下横穴墓群があります(「小田原市史」)。このように周辺の地域では縄文時代から人々が住み始めていたようですが、久所にはそのような痕跡はありません。

また周囲の三つの地区名はいずれもその地形に由来しています。府川は湿地や泥深い低地を意味する古語「フケ」から来ています。この説が一般的のようです。北ノ窪も湿地帯でしたが、むしろ府川の北にある窪地であることを強調して名付けられたとされています。

南足柄市側の沼田は東側を狩川、南側を分沢川とする沼地であったことに由来しています。これらの地区は古くから人が住み、地名も長い時代を経て熟成し定着してきたのであらうと思います。

沼田との地名は鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』の中に源頼朝が建長三年(一一九二)に足柄峠越えの要人警備を命じた一隊の中に沼田太郎との名前が現れると記されていますから(「南足柄市史」)、

沼田との地名は平安時代の末期にはすでに存在していたことがわかります。

府川は、小田原北條時代の永禄二年(一五五九)の『小田原衆所領役帳』に北條家の御馬廻衆であった狩野泰光の知行地として出てきます(「小田原市史」)。しかし実際にはそれよりも昔から存在していたのでしよう。

調べていくと、周囲の地区の中で久所だけが特異的でした。なぜ久所なのか、いつ頃から久所なのか、他の地域にもあるのだろうか、と気になってきました。

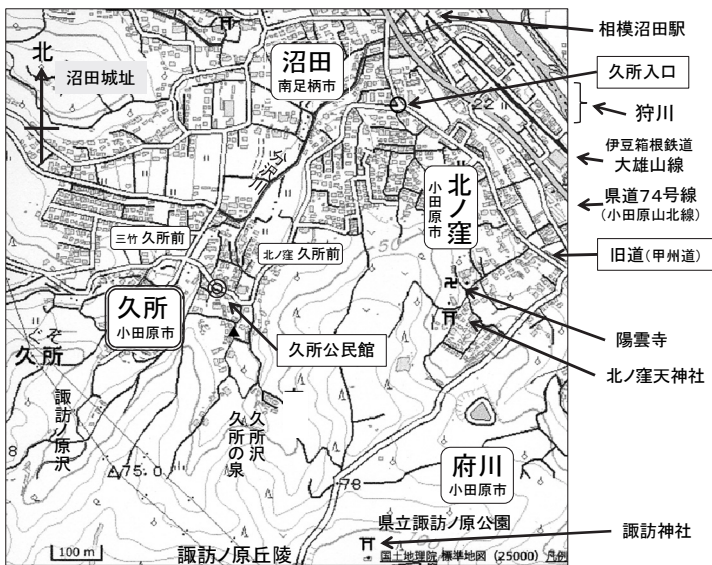


図1 (国土地理院地図を基に筆者作製)

久所は他にもあるのだろうか

そもそも久所という地名はめずらしいようです。約三十一万語の地名を載せているという『現代日本地名よみかた大辞典』では一カ所(神奈川県中井町の久所)のみでした。しかし対象となっていない地名は現在の行政地名に限られています。そこで「地名」と名がつく三十数種類の辞書・辞典・資料の類を図書館で探しだし、網羅的に調べることにしました。また久所(ぐぞ)は平安時代末期に荘園管理のためにおかれた役所である公所(ぐぞ)に由来するとの説もあるので、これらの文字が出てくる言葉をインターネット上で検索し、加えて国土地理院地図に表記されている全国地名調査も行いました。その結果、久所との地名は全国で以下に示す六カ所、公所は三方所が見つかりました(図2)。

小田原市の久所(ぐぞ)

『郷土の地名』(立木望隆著)によれば、久所について木所(きどころ)が訛ったとの説と平安時代に公文所が置かれていた場所である公所(ぐぞ)に由来するとの説があるようです。しかしこの地域の歴史を調べても久所には公文所が置かれるほどの荘園は存在していないので、由来が公所にあるとする説は疑問です。

平安時代に書かれた『和名類聚抄』も調べたのですが、近くの飯田岡の地名ルーツといわれている飯田(郷)は出てきませんが、久所に関連しそうな地名は出てきません。

久所の地名が初めて出てくるのは江戸時代後期に編纂された『新編相模国風土記稿』でした。これによれば足柄下郡早川庄の府川村の項に、小字として久所・萬石・楠木・西ノ久保が出ています。また隣接する北ノ窪村の項には小字として山崎・久所前がありました。小田原市内から南足柄市関本に抜ける甲州道(旧道)から久所への分かれ道は今でも久所入口と呼ばれています。つまり人びとは北ノ窪村の久所入口から山を迂回し久所前を通って久所に歩いたこととなります。

さらに法務局で土地台帳を調べると、久所と沼田に挟まれている南足柄市三竹地区の一部にも小字として久所前が残っていました。つまり久所に隣接した他の大字には小字としての久所前が二カ所あったのです。

ところが久所との地名は『旧富水村地図』(昭和七年発行)のどこにも見あたりません。府川の土地台帳を調べても久所という小字はありません。久所という地名は旧富水村が成立した明治二十二年以降は行政上では抹消されて

いるのです。地名として表記されているのは国土地理院の二万五千分の一の地図だけでした。

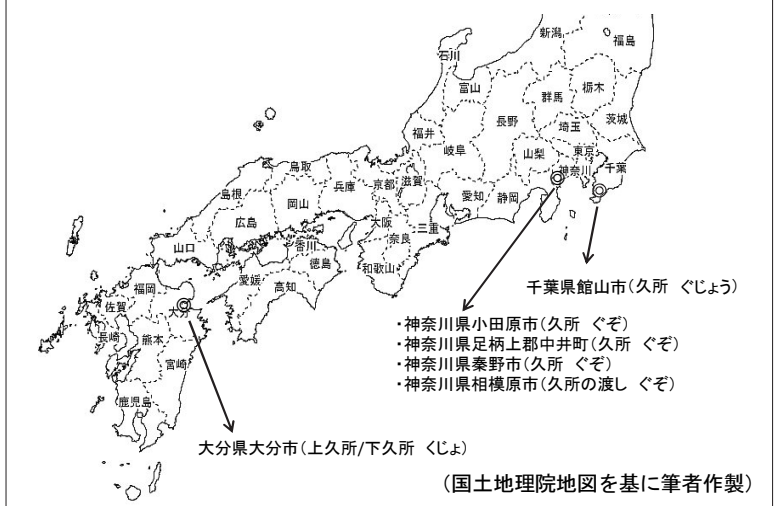
神奈川県中井町の久所(ぐぞ)

中井町在住の郷土史家石黒弘さんに中井町の久所のルーツについてお聞きしたところ次のようでした。

この地域は古くから公所(ぐぞ)と呼ばれていたと思われるが、後に同じ呼び名の久所(ぐぞ)に変わったようだ。なぜ変わったのか、いつ変わったのかはわからない。昭和三十三年に書かれた村史にも何も書かれていない。江戸時代の古文書にはすでに久所村との記述がある。中井町の久所と小田原の久所との関連についてはわからない。小田原の久所の地域は平安時代末期に沼田城のある沼田氏の領地であって、公所が置かれていたのではないかとの説を立木望隆さんから聞いたことがある。その公所が久所に代わったのではない

か
また久所(ぐぞ)の由来は、むかし役所があった所〓公所また

図2 地名「久所」(ぐぞ・くじよ・ぐじょう)の全国分布



は木所が訛ったとの二つの説があること、江戸時代にはすでに久所村と呼ばれていたと記されています(『中井町史』)。近くの平塚市には公所(ぐぞ)という地名がありますが、これとの混同を避けるために公所から久所に変えたのではないかと推測も書かれました。

よく知られているように、中井町は平安末期から鎌倉期にかけて中村郷のあった地、日本における武士の発祥の地の一つです。中村氏(中村宗平やその子の土肥美平な

ど)は源頼朝を助け、鎌倉幕府開府に大いに貢献し、有力な御家人となつています。中井町には保元二年(一一五七)創建の五所八幡宮があり、源頼朝の信仰が厚く、鎌倉幕府の庇護を受けていたようです。

現地に行ってみると、五所八幡宮のすぐそばに久所公民館があり、近くには中村氏館跡もあり、この久所が当時は中村郷の重要な場所であり、荘園管理のための公所があったであろうことは容易に推測されました。また近くには久所前との地名が小字としてあり、井之口方面から山を越えて久所へ行く道の入口には久所入口というバス停留所もありました。久所入口・久所前・久所との地名の三点セットは小田原市の久所とまったく同じでした。

神奈川県秦野市の久所(ぐぞ)

『秦野市史』や『秦野史研究』誌を含めた文献調査やインターネットによる検索では久所は見つかりませんでした。しかし国土地理院の地図で久所と書かれた地名を秦野市立上小学校北側に見つけました。

現地に行ってみると山裾の道沿いには「ここは久所自治会の避難所です」とか「星屋・久所組のごみ収集場所」と書かれた標識がありました。つまりこの付近の集

落はたしかに久所と呼ばれていくことが確認できました。しかし秦野市ホームページの「自治会名一覧」には久所自治会との名前はありません。最近になって他の自治会と統合されたのかもしれない。

秦野市はもともと平安末期にこの地を支配していた波多野氏の波多野郷であり、日本の武士の発祥の地の一つです。波多野氏の一族の大友氏は現在の小田原市に東大友と西大友の地名があるように、この大友郷を拠点にして足柄平野の北側一帯を領有していたようです。調べていくと戦国時代のキリシタン大名として名高い豊後国の大友宗麟の本貫がその大友郷であったことも知りました。早川郷を本貫とする中村一族末裔の戦国大名小早川秀秋もそうですが、日本の歴史において小田原の地が日本の武士社会に人材を送り込んだ土地柄であったことをあらためて知りました。

神奈川県相模原市の久所(ぐぞ)

『難読地名辞典』には、中井町とともに相模原市の久所が出ています。『日本歴史地名大系』の『神奈川県地名』には「久所河原」「久所渡」はありましたが、国土地理院の地図には地名としての久所はありません。

現地に行きますと、相模川の高

田橋の東端に「久所の渡し」と書かれた石碑が立っていました。これは小田原北條時代に小田原と関東北部の所領を結ぶ街道、江戸から駿河国沼津宿に通じる矢倉沢往還、大山参りの道が相模川と交差する要所であり、大正十三年に初代の高田橋ができた場所です。対岸への渡しがあった場所です。近くの河岸段丘の集落は現在では水郷田名ですが、昔は久所と呼ばれた宿場でした。その由来としてこの地に公文所が置かれていたのですが、のちに「文」が省かれて公所(ぐぞ)とよばれるようになり、さらに相模川の洪水のたびに人々が久しくこの宿場に逗留することが多かったのです。次第に同音の久所(ぐぞ)となったと伝わっているようです。

千葉県館山市の久所(ぐじょう)

インターネットの検索でやっと思つた文字が館山市にある「久所集会所」でした。そこは館山市から白浜に抜ける県道八六号線沿いの山あいの盆地、神余(かなまり)地区にありました。その地には岩壁のほころの中に久所地蔵があり、集落に流れる巴川には久所橋が架かっていて、近くには久所集会所と書かれた建物があることに気がつきました。畑を耕していた古老に聞くと、その集落は久所(ぐじょう)と呼ばれている

ことがわかりました。

神余(かなまり)とは「神が余る」の意です。律令時代は郷に住む家の数が五十戸をこえると増えた分を別の郷とする決まりがあり、それを余戸(あまりべ)と呼びました。この地は安房国の一宮である安房神社が近くにありますが、その安房神社の神に仕える人たちが住んでいた神戸(かんべ)郷の戸数が多くなり、新しく開拓して移住したので、その地を神余と呼ぶようになったそうです。

この地には神余城跡や神余氏館跡があります。神余氏は平安末期から鎌倉期にいた豪族であつて、源頼朝が石橋山合戦で敗れ、土肥実平とともに真鶴半島の岩海岸から舟に乗って房総半島の安房国に逃れた際に頼朝一行を出迎えた一人であり、頼朝を助け鎌倉幕府開府に貢献したという家柄です。神余氏と土肥氏がこのような近い関係にあつたとは知りませんでした。

ついですが、神余氏の館跡には明治七年創立の由緒あるモダンでハイテクな神余小学校が建っていました。小学校のホームページを見ますと修学旅行は小田原に来て箱根に一泊し鎌倉に寄つて戻るコースのようでした。源頼朝を通じての小田原・湯河原と神余、これもまた歴史の因縁を感じました。

大分県大分市の久所(くじよ)

『日本地名大辞典』の大分県部に、現在の太分市には久所村(くじよむら)があったと記されています。大分県の別の詳細な資料を見ると、明治九年に合併して丹川(あかがわ)村と名前を変え、までは確かに久所村が存在していました。地図で確認すると隣接して上久所と下久所があり、この地に久所村のあったことが推測できます。

公所について

公所は全国で三カ所見つけました。いずれも神奈川県内のみで、平塚市の公所(ぐぞ)、厚木市の公所(ぐじよ)、大和市の公所(ぐぞ)です。地名の由来はこの地に平安時代あるいは鎌倉時代の公文所が設けられていて、「文」が取れて公所(くじよ)となり、さらに公所(ぐぞ)となったとされています。

ところで「公所」は、現在でも役所や公共施設、会館などを表す一般名称として使われています。地名としての公所が少ないのはそのためなのでしょう。

なぜ久所なのだろうか

地名は、特にその地域の古い小字の類は、そこに住む後代の人たちの記憶から消え去ってしまうことが多いです。久所ということが多々あります。

地名も昔は全国に数多くあったと考えた方がいいのでしょうか。しかしそれにしても現在残っている久所や公所との地名が神奈川県、旧相模国に圧倒的に多いのはなぜなのか、残る何らかの理由があったのでしょうか。『新編相模国風土記稿』もその一因なのでしょうか。

ともあれ私の住む小田原市の久所についてだけ言えば、古くからこの地に住んでいた人々の間で熟成され伝承されてきた地名というよりはむしろ歴史のある時期に突然に登場したように感じられるのです。つまり原初の由来は別にして、昔誰かがこの未開拓の地に入り、その人たちにとって特別な地名をつけたとする「地名転移説」がふさわしいのではな

いかと思うようになりました。

例えば『地名の由来を知る事典』(武光誠著)によれば、古くは奈良時代初期に書かれた『播磨国風土記』の中に、「中国からの渡来人の集団が最初に紀伊国名草郡大田(おおた)の村に住みつき、次第に勢力を伸ばして新たな土地を得るたびにその地を次々と大田と名付けた」とあるそうです。近年でも北海道に入植した土地を開拓した奈良県十津川村の人たちがその地を「新十津川」と命名した例はよく知られています。イギリスのロンドンと同じ名前

をつけた地名はカナダを始め世界各地にあります。

仮説・久所の始まり

久所の始まりに関して最長老の高橋清さん(大正十四年生)にお話を伺うことにしました。お話し次のようでした。

伝え聞いた話では、昔、七人の武者がこの地に住み着いたそう。そのきっかけは小田原北條氏が豊臣秀吉に敗れ、北條氏に仕えていた多くの武者たちが職を失ったことにあるのではないかと

驚いたことにこのお話はまさに地名転移説の可能性を裏付けています。多くの昔話や神話がそうであるように、伝承されている話が真実であるとは限りません。しかし真実の痕跡は残されているのであろうと思います。

もしもこの伝承が正しいとしたならば、それはいつ頃、誰だったのか。武士の集団が未開拓だったこの地に入り、武士から農民へと生き方を変えるには何かの特別な事件があったはず。その歴史上の事件とは、仕えていた主君の改易・断絶などによって知行・俸禄を失って失業したことによるものなのでしょう。またその武士たちは互いに地縁や血縁が

あり、同じ主君で結ばれていた可能性もまた高いでしょう。

小田原北條氏の滅亡の際には、豊臣秀吉が北條氏家臣の仕官先を直接に世話した例もあったようですが、身分の低い武士たちはそのまま放逐されています(『小田原市史』)。江戸時代になっても城主が交代するたびに「家臣たちは小田原城明け渡しの際に召し放たれて離散した」ようです(『おだわらの歴史』)。その中でもっとも大量に放逐された事件はやはり小田原北條氏滅亡時と思われ、また武士たちは新しい地を自分たちにとって特別な名前にしたのですから、本貫は武士の出身地としては名乗るにふさわしい由緒のある土地であったはず。中井町の久所はそのような地の一つです。さらには地名として久所・久所前・久所入口が残っていました。二つの地域で三つの地名が一致していることは実にめづらしいと思います。

以上のような調査と伝承から、私の住む「久所の始まり」は、今から四百年ほど前に小田原北條氏が滅んだときに、現在の中井町の久所に縁の深い武士たちがこの地に入り、開拓して久所と名付けた可能性が高いのではないかと考えるようになった次第です。

(小田原市久所在住)

真田氏の城下町 松代の史跡巡り

河合 多美江

五時起床、今朝は曇り。あまり好天は望めそうもない。最近腰を痛め杖を頼りの歩行となり、今日の行程を無事終わらせるように祈りつつ小田原駅西口へと急ぐ。今日はバス近くで受け付けを済ませる。すると随分空席があり、聞くと急に大型が配車されたとか、友人が満員で参加できなかった事が大変残念だ。

私は最近では久しぶりの参加だったので、車内に石井艶子さん、田口鏡子さんの馴染みのお顔があつてホッとす。今回は走行距離が長い為運転手二人とガイドさんが添乗して定刻出発、一人の遅刻もなく順調な滑り出し。車内はお陰様でゆったりとして、一人でワンボックス占領という贅沢な旅となった。

車は255号線から大井松田インターへ。晴れていれば美しい富士山を拝めるのに今朝は雲の中でとても残念。バスは足柄サードビスエリアを経て御殿場方面へと向かう。そして関越自動車道に入ったが曇りの為か山中湖も良く見えず、甲府、八ヶ岳PA、諏訪を経て長野自動車道に入り松本市、梓川SAから千曲川を渡りやっとな松代に入る。

道中まだ紅葉には早く、それでも沿道の並木や山々の色づきを楽しみながらたいした渋滞にも遭わず順調に定刻より早めに着いた。お蔭で会場で暫く待たされたの昼食となり、釜飯のご飯を美味しくいただきいよいよ見学に向かう。

釜飯の重き器を持ち帰る

溢るる。パワー弾ける笑顔

昼食後現地のボランティアガイドさんにご挨拶して真田宝物館へと向かう。時間を限られているせいか割に簡単な説明であまりじっくり見ることなく進む。加賀百万石の前田家でさえ維新の時にかなり売ってしまつたので、宝物はたいして無いとの事だが、この真田家はあまり売らず大量に残されているのは全国でも珍しいとガイドさんの誇らしげな説明であつた。

昭和四十一年に真田家から町に一括寄贈され、その数万点に及ぶ歴史資料を昭和五十一年に鉄筋コンクリートの宝物館を建てて保存し中々良く整備されてきた。宝物の中には「青江の太刀(国重文)」をはじめ武器甲冑・書

画・茶器・古文書・等貴重な品々が納められていて石田三成からの加勢要請の直筆の手紙も残っているとか。

しかし前田家より数が多い、と言われても百万石大名と十万石大名ではその家格の違いで残っている品物のレベルは数段の差があるのではなからうか、と思われる。

戦国の姫等あそびし雑道具

たくみな技巧は今も雅に

古道具に昔の息吹感じつ、

きざむ歴史に思ひ馳せなむ

宝物館より十^分程南に歩くと黒塗りの冠木門が見え、四方を土塀に囲まれた大名邸に着く。文久二年(一八六二)に九代藩主幸教が参勤交代の緩和で帰国を許された義母お貞の方の為に建造されたもの。敷地二千六百坪、建物面積四百五十坪、部屋数五十三室という広大さは流石大名邸である。幕末の日本の面影を良く残している、全体に簡素な中に風格のある優雅さをたたえ、桂離宮のそれに似た感じがした。庭は回遊庭園で四季折々の美しさを味わえる。京都の公家、竹屋中納言の庭を模したといわれ、まさに紅葉の真つただ中で遠くの山を借景に庭内の松、もみじ、雪柳と各々競いあ

つて織りなす情景は見事だった。

陽を受けて赤黄みどり鮮やかに

織りなすシンフォニー借景の遠山

真田邸の西向いにある松代藩文武学校(国史跡)は水戸藩の弘道館を本手に八代藩主真田幸貫が佐久間象山等の意見を採り入れて建造し安政二年に開校された。

藩士子弟の教育に力を入れ、黒門から中に入ると柔術・剣術・西洋医学・砲術・文学所・弓術所・槍術所と今でいえば総合大学の感があり、この中から幾多の優れた人物が輩出されたであろう。矢張り幼児教育が如何に人間形成にとつて大切であるか、昔の日本人が重視したあらわれだと思ふ。

藩校の床板浄く拭かれて

子弟学びし往時を偲ぶ

松代城は平成の大普請で櫓門、木橋、土塁、堀等が江戸時代後期の姿に近い状態で復元された。太鼓門の冠木は十二^分の櫓を使用し、屋根は厚さ十二^分のサワラの板を重ねた「榎(とち)葺」である。出入口は枳形と言われ敵が真直ぐに入れないように鍵型通路になっている。

この頃になると大分時雨て来

(小田原史談会3月の研修会ご案内)

江戸の名残をとどめる川越を ゆったりと散策しよう

- 1、日時； 平成27年3月17日(火) 小雨決行
- 2、集合； 小田原駅西口 午前7時50分 出発 午前8時
- 3、帰着； 午後6時15分頃
- 4、参加費； 10,000円 (当日、現金で集金します)
- 5、コース； 小田原駅発 — 本丸御殿ゾーンの散策 — (昼食) —
川越蔵造りゾーン散策 — 小田原駅着
- 6、申し込み； 平成27年2月17日(火) 午後1時~8時
18日(水) 午前9時~午後6時
電話 0465-22-1076 内田まで



松代象山地下壕

て雨がパラつき出し、皆足早にバスに戻ったが戻る途中廻り道をしてしまい、疲れた身には一寸辛かった。

真田氏は戦国時代を祖父幸隆、父昌幸に次ぐ信之の時、徳川方について家を守り、父昌幸と弟幸村は袖を分かって戦うという戦国時代武家独特の生き方をしている。

勝馬に乗り替へ名をとどむ
真田武士の手綱さばきよ

バスは松代大本営跡に着く。象山口より地下壕に入ると急な下り坂となり、皆転ばないようにとそろそろ進む。大東亜戦争末期、海に遠く岩盤で十ヶ爆弾にも耐えられ山中の事で爆撃もしにくい処として選ばれたこの地に

陛下の御座所、軍の大本営を移す為に昭和十九年十一月から九ヶ月程の期間に掘られたらしい。当時国民学校の生徒、周囲の老人、女性、それに朝鮮人等多数の人達が使役され大変な重労働だったようだ。入ってみると唯掘られただけのトンネルが長く時折横への掘り込みがあり、往時の面影等何も無く、何とも言いようのない空しさを覚えた。

西欧の植民地解放を謳い上げ
掘られし壕の今は空しく

猛爆も耐えられし地とみなされて
掘抜かれし壕に秋深まりぬ

長い走行距離の一日は終わりに同帰りのバスはしばし休憩タイムとなり予定通りの午後八時半頃小田原着となった。一人の事故もなく皆様お元気で帰着出来て、本当に喜ばしい事だったが車中の行き帰りにガイドさんが「信州の松茸は素晴らしい」と盛んに煽ったのにその一片にも逢わなかったのが残念至極。

安曇野の味わい深き松茸の
姿拝めず香りすら無し

私もどうやら全行程を歩き抜けた事に感謝しつつ終了。皆様ありがとうございました。

特別賛助会員

- 紳士服の **アメリカヤ** 和 そば 小田原城趾前 田毎
- 税理士法人 **報徳会計** の わん と味 **ぶるほ**
- 伊勢治書店** **宮**
- かまぼこ** 茶半家具株式会社
- (株) **オクツ薬局** **ちん** 聖う本店
- 小田原ガス** 割烹料理 **鳥かつ楼**
- 小田原報徳自動車 **和菓子菜の花**
- かまぼこ籠 **清** **杉崎茂法律事務所**
- かみやま小児科クリニック **平井書店**
- 興電社** (有) **古屋花店**
- 創業四百年有命 **料理茶屋** **株式会社 報徳**
- 小伊勢屋** 建築金物 (株) **星崎仲吉商店**
- (有) **小松石材店** 家庭金物 **本多時計店**
- COMTEC コムテック株式会社** 学生専科 **マルク**
- さがみ信用金庫** 曾我の梅干 **美の政**
- 塩辛・かまぼこ (株) **アルファ**

謹賀新年

会員の皆様 本年もよろしくお願い申し上げます
 平成二十七年 元旦
 会長 平倉 正

小田原史談(年四回発行)
 創刊昭和三十六年一月
 会創立昭和三十年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
 〇〇三二〇二二六四三三六
 小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

大正時代(震災後)の片岡永左衛門日記を本誌一六〇号から二二二号で掲載しましたが、今号より昭和二年から九年の片岡日記を掲載します。星野さんの「片岡日記の背景をさぐる」を読むと、より深く片岡日記が理解できます。今後の掲載にご期待ください▼石井さんが江戸遊郭吉原の開発人庄司甚右衛門の塚原出身説を紹介しています。台東区にある甚右衛門の碑と一緒に吉原の遊女が捨て置かれたという浄閑寺、樋口一葉「たけくらべ」の舞台にある一葉記念館を訪れることをお勧めします▼小田原宿本陣跡にある山田呉服店の御主人に、創業時代・修業時代・二宮尊徳が家財を立て直した。服部家等々について小田原の「浜言葉」を交えながら話を聞くことが出来ました。それにしても「オッパイッテ」とはどういう意味なのでしょう。今回は松永耳庵翁との交流他を掲載します▼鳥居さんの「小田原大秘録」は谷津大稻荷神社の由緒、竹の花から現在地に移った経緯を知ることが出来る貴重な記録です▼宮原さんが久所という地名を丹念に調査されました。諏訪ノ原の北、久所(ぐそ)を案内していただいた時タヌキに出逢ったのには驚きました▼河合さんの紀行文・短歌で歴史を守り抜こうとしている松代を鮮明に思い出すことが出来ます▼剣持さんの俳句にある虫草はツユクサの別称であることを学びました▼新しい年も小田原史談をご愛読ください。

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四一・二四

電話 〇四六五二二三八六三三五

松島俊樹